

関東学院 学院史資料室 ニュース・レター

No.18

2015.3

校訓「人になれ
奉仕せよ」特集

目次

三春台校地と六浦校地に建てられた「校訓石碑」	1
校訓「人になれ 奉仕せよ」の思想的淵源	2
校訓「人になれ 奉仕せよ」とセツルメント活動	9
関東学院セツルメントの活動について	12
故坂田創先生絶筆文	14
坂田創 先生 告別式 「説教」	15
「坂田 創先生の思い出」	18
神谷量平という人 (1914 ~ 2014)	20
神谷量平氏の遺されたもの	25
生誕100年に寄せて	26
神谷量平さんインタビュー ~生き続ける88年の歴史~	27
新聞掲載記事&学院史資料・情報提供のお願い	29
学院史資料展2014「建学の精神と校訓「人になれ 奉仕せよ」の教育」	30
編集後記	35
愛と平和と祈りの人・グレースット先生の記念碑、関東学院へ	36



1938(昭和13)年、坂田祐院長の還暦祝い記念に三春台校地の中学部
本校舎(現、旧中学校本館)の正面玄関横に建てられた校訓石碑
(学院史資料室所蔵写真)



2009(平成21)年10月に学院創立125周年の記念として六浦校地の
大学正門横、1号館側に建てられた校訓石碑(学院史資料室所蔵写真)

校訓「人になれ 奉仕せよ」の思想的淵源

関東学院大学名誉教授・元関東学院宗主任 高野 進

はじめに

坂田祐は1919年に中学関東学院第一回入学式にあたり、今も受け継がれている「人になれ 奉仕せよ」の校訓を告辞した。坂田はそれについてこう言っているだけである。「これは私が祈って上から示されたものであった」。坂田はそれ以上についてどこにも記していない。しかしその思想的な淵源については、少なくとも次のものが挙げられる。

- (1) キリスト者として愛読した聖書の思想。
- (2) 在学当時の旧制第一高等学校校長、新渡戸稲造による『衣服哲学』（カーライル著）講演などの著作。
- (3) 門弟として聖書講話に忠実に出席し、生涯愛読した内村鑑三の諸著作、特に『後世への最大遺物』。
- (4) 大学で学んだインマヌエル・カントの人間論を中心とした思想。
- (5) 大学で直接講義を受けた碩学ケーベル博士からの人格的・思想的な感化。
- (6) その他——多くの方々との出会いと対話から学びとった思想的示唆。

今回は、(2)を取り上げてみたい。

カーライル著『衣服哲学』についての新渡戸稲造の講演



▲(新渡戸稲造)1932年春、ニューヨークにて佐藤全弘著『新渡戸稲造の信仰と理想』(1985年、教文館発行)より

成ったものである」

ここに見られる「出版に必要と思わるる訂正加筆をして成ったものである」とあるのは、速記原稿を読み直して、エディティングし、体裁を整えたり、欠落部分を補完することもあっただろうが、1938年という時代から、

官憲の検閲を無事通過できうる、あるいは後に掘り起こされて筆禍事件に巻き込まれないように表現への配慮のために「訂正加筆」しなければならなかったのであろう。実際、講演の中で行った新渡戸のコメントは、かなりきわどく当時の政府の政策を批判している。このカーライルの著作自体がそのような英国社会批判の志向を持っていたことも事実である。

実は連続講演の速記録は、大正7(1918)年8月に軽井沢夏期大学で行われたものであるという。中学関東学院開設は大正8(1919)年4月であった。つまり前年に行われたものであった。新渡戸はこのカーライルの『衣服哲学』をめぐる講演をたびたび行なったという。高木は「之を御講義なさったのも少なくとも数回、あるいは10回にも及ぶのではないであらうか」と記す。坂田は1909(明治42)年から1912(大正1)年まで第一高等学校に在学した。当時の校長が新渡戸(1906-1913在職)であったので、この講演を直接に聞いたと思われる。この講演が活字になって、最初に出版されたのは、1938年であったが、大正7(1918)年に行われた新渡戸の講演の速記録が残っていたのである。他にも聴講者たちのメモがすでに出回っていたとも考えられる。

高木はこうも述べている。

「カーライルの思想が、『サートー・リサータス』の一書に、その粋を蒐めて盛られていることは、本講演の中にも述べられている通りであるが、同時に新渡戸先生思想性格が、如何に深くカーライルの影響を受けていたかも亦、本書を繙く何人もが見逃し得ない所であろう。」

高名な英文学者の齊藤勇は、日本の識者の間で、当時、カーライルが高く評価されていたが、特に新渡戸稲造と内村鑑三がその代表であると指摘している(『英文学史』)。その二人が坂田の恩師であったわけで、カーライルから深い影響を受けたのも当然であろう。

高木はこの講演原稿を出版するに際して、その目指すところをこう記した。

「人格の陶冶が教育の目的として強調され、教養が社会の要求として益々高唱せられる時に、此の書を我が国読書界に送り、殊に次代の責任を負担する青年男女の諸子に送るを得ることは、関係者一同の欣幸とする所であり、編者等の苦心を償って余りがあるものと云うべきである。」

坂田はこの高木の意図するところを十分理解することができたばかりでなく、新渡戸の講演が訴えていたことを、新たに横浜に始める中学関東学院の教育に生かそうとしたことは、十分推測できる。世に出た出版年代の

時系列からは、納得できないかもしれないが、この講演が正式に上梓される前に、坂田自身が直接に聴講した講演から示唆を受けたか、当時出回っていた講演記録から何らかの示唆を受けて、校訓に生かそうとしたのは確かであろう。

新渡戸はカーライルの『衣服哲学』を札幌農学校時代に M. C. ハリス (1846 - 1921) から譲ってもらっている。明治 13 (1880) 年、18, 19 歳の頃であったと、新渡戸は講演の中で述べている。当時、新渡戸は母親の死に間に合わず、悲しみの中にあった。その著作が悲しみを克服するために大きな助けとなったようである。

その講演の「序説」の中で、新渡戸はこう記している。「私はカーライルに私淑している、殊に『サートー・リサータス』は 28 遍読み返した、—その後、読返したのを加えると、かれこれ今では 32 回になる」

『サートー・リサータス』の英文原書は、英米人も敬遠するほどに難解である。新渡戸はそれを繰り返して読み、やがては、綴じ込みがばらばらになったので、二度も製本し直したという。こうしてこの思想を自家薬籠中の物としたのであろう。

これは英文の著作だが、原題はラテン語で表記されている。《Sartor Resartus》の日本語訳は、新渡戸によれば、すでに土井晩翠訳と高橋五郎訳があるという。新渡戸はそれらの翻訳を読んだのではなく、原書を繰り返し読んだという。筆者はそれらの邦訳本を見ていない。手元には、岩波文庫版の石田憲次訳がある。これは 1946 年 7 月の第一刷となっている。戦後間もないものである。坂田はそれ以前に発行された土井訳または高橋訳を知っていたかもしれない。

原題の意味するところについて見よう。Sartor とはラテン語では「仕立屋」「修繕する人」という意味である。Resartus の語源の sarcio「繕う」という意味に由来する。Resarcio は「改良する」「再び繕う」という意味である。英語に訳すと、“tailor retailed”、“patch repatched”となるようで、その意味は、「二度仕立て直したもの」、「つぎはぎしたものを、さらにつぎはぎしたもの」、「仕立て直された仕立屋」、「仕立屋の仕立て直し」などと訳することができる。これは戯言（ざれごと）的な表現である。これはスコットランドの人々が歌っていた歌詞からヒントを得たと言われるが、研究者たちは、今なおその出典となる歌を探し出すことができていない。この作品のジャンルは「風刺的評論」に分類されているが、哲学的な評論とも言える。

カーライル著『衣服哲学』についての講演と校訓の結びつき

カーライルによれば、今日、文化や学問が進んでいるにもかかわらず、衣服に関して哲学的、歴史的な分野に



▲イエスを信ずる者の契約 (Covenant of Believers in Jesus) クラークが書き学生が署名した (高谷道男編『目で見える宣教百年史』1959年、日本基督教団出版部より)

おける研究著作がない。これは奇異なほどであるという。ところが、カーライルのところにヴァイスニヒトヴォー (ドイツ語では「どこかわからぬ所」の意味) に住むトイフェルスドレック教授 (その名の意味は「悪魔の糞」、新渡戸は「鬼糞」先生と呼ぶ) から新著が送られてきたという。これをカーライルが書き直して紹介するという手法をとった。(しかし当初は英国の出版社がこれを引き受けてくれないために、アメリカでエマーソンの計らいもあり、英国版よりも 2 年前、1836 年に米国版が先に出た。)

トイフェルスドレックの思想といういわば「衣服」を「仕立て直して」、イギリスの読者に紹介するという。この思想が種となってやがては社会をつくりかえることを目指していたことは勿論である。実はカーライルはトイフェルスドレックという人物に「仮託」して、自分の思想を展開しようとした。これは痛烈な風刺的評論なので、当然やがては、著者に投げかけられるかもしれない反撃を予想して攻撃の「的」を、自分からトイフェルスドレックに転嫁することができるのではないかと目論んで「仮託」の手法をとったのである。したがってカーライルは、架空のトイフェルスドレックの言うことだと述べるが、兩人の間の思想と言葉はどれがどちらのものかは識別しがたい。

第 1 巻第 5 章「衣服の世界」について、新渡戸はこういうカーライルの記述を引用している。

「モンテスキューが『法の精神』を書いたように、私は『衣服の精神』を書くことができる」そして「われわれの法の精神 (Esprit de Lois)、正しくは慣習の精神 (Esprit de Coutumes)、それとともに、衣服の精神 (Esprit de Costumes) の研究書が必要である」と。フランス語で「クーテューム」(慣習)と「コステューム」(礼服)を用いて言葉の遊びをしながら、カーライルは衣服の

哲学の必要性を説いている。

衣服をよく研究すれば、その人の性格までわかるという。衣服は寒さを凌ぐためというよりは、装飾のために作って用いたのである。やがては、結果として、「衣服は私たちに個性、差別、社会組織を与えた」という。これは衣服を通じた社会洞察である。

このことについて、新渡戸はこうコメントする。「衣服ができたから、個性というものが起った。」そして「差別が起って、もう一步進んで、社会の贅沢も衣服から起こってきた。」やがては「衣服が我々を覆うてしまって、魂はなくなって Clothes ばかりになってしまうのは恐ろしい。」ここでは物に支配される近・現代の問題性が指摘されている。

実は、新渡戸は日本社会の問題性を見抜いて、こう皮肉な論評をする。「一国の体裁を外国に表すにも衣服によってするくらい、衣服の発達はたいしたものである。」

第1巻第8章「無衣の世界」については、新渡戸は次の文を引用する。

「社会は服地の上に建てられている」「社会は、ちょうどファウストの外套、いな寧ろ使徒の夢にある潔き獣と潔からぬ獣とを乗せた布のような、布地に乗って無限の大海を渡る。もしこのような布が外套が無かったなら、無限の深遠に沈むか、無一物の虚空に昇るかして、何れにせよ最早存在しなくなるであろう。」

ここで「人間とは何か？」と問うカーライル（トイフェルスドレック）の言葉を、新渡戸は引用して聴衆に考えさせる。

「私は誰であるか、このわれは何であるか？…『われ思う、ゆえにわれあり』ああ、哀れなる思惟者よ、これだけでは一向何にもならない。確かに私は存在する、そして最近までは存在していなかった。しかしどこから来たのであるか？ どうして存在するのか？ どこへ行くのか？」

これは人間についての実存的な問いである。ここでは新渡戸はこうコメントする。

「この世は夢なり、眠りなり、我々の今日の life を如何にして本気に知ることができるか。…我は何も知らぬと思うものが一番物を知っているのではなからうか。それでこの衣服は一つの現象で物にすぎず、〈物自体〉(Ding an sich カント的な表現—筆者注)ではない、人その人ではないんだから、だんだんと考えて行って、シェイクスピアも『我々の仕事は夢の産物だ』といているが、我々が現象を実際とと思っているが、ことごとく夢のようなものだ。」

「衣服とは何だ。…己の着ている衣服は少し前に動物の着て居った衣服を剥いで自分の衣服としている。…他から借りてきたものばかりに重きをおいて、物、その物の真髓を穿つことは出来ない。」

新渡戸はこのカーライルの言葉を思い切って言い換

えて、こう述べる。

「外に着ている衣服など脱してしまって、人間は真の裸であると知る時、どんなに馬鹿なものだろう。…ことごとく皮膚が脱落した時に、初めて一つの真実がわかる。その真実とは…essence (実在—筆者注)である。真実の essence なるものは皮を脱して初めて解る。」

人間そのものは、そのまもっている衣服ではない、さらに突き詰めると、肉体もまた衣であるので、それは人間そのものではないという。

第9章は「アダム主義」の項目では、これを新渡戸はこう解している。石田訳ではこれを「裸体主義」としている。

「現在の世の中では衣服が誠に大切なものである。ただ衣服の下に人間の身体があることを忘れてはならない、またその身体の奥に人間の真実があるということを忘れてはならぬ。」

新渡戸はここでトイフェルスドレック（カーライル）の訴えを引用する。

「思索できる読者よ、その理由は二つあるように私には思われる。すなわち第一に、人間は霊 (a Spirit) であって、目に見えぬ絆によってすべての人間に結び付けられていること、第二に、彼はその事実が眼に見える標識である衣服をまもっていることである。」

肉体が衣であれば、その中の「霊」が人間性 (Menschheit) であるという。そしてしかもそれは孤立せず、他者との連帯性を本来持っているという (Mitmenschheit)。それはやはり肉体をまい、衣を着ることによって、他者と区別されながら、同時に他者と結びつくといえる。



▲キリストを信ずる札幌農学校第一期 第二期生有志 (高谷道男編『目で見る宣教百年史』1959年、日本基督教団出版部より)

第10章は「純粹理性」という見出しになっている。これは明らかにインマヌエル・カント (1724 - 1804) の表現にならっている。新渡戸によれば、この部分では、衣服なしに世の中の真相を見たならば、どんなものであろうか、ということが扱われていると言う。衣服は「真髓を覆うことはできるけれども、それをなくすことはでき

ない。だから衣服の下に Naked World があることを忘れてはならない。」

ここで、新渡戸はカーライルの次の文を引用する。

「純粹理性の眼から見て、彼（人間—筆者注）は何であるか。靈魂（Soul）であり、精神（Spirit）であり、神聖なる現象（Apparition）である。」

新渡戸はこれをこう解説する。

「肉を着たままの人間なるものは、Time の Immensities（莫大なもの）と Space の Immensities の中心に立っているのではないか。」「（人間には）Spirit がある。すなわち天より授かった celestial primeval brightness（こうごうしい、太古からの輝きで、これは広い意味で申す仁愛ということである）がある。」

虚飾を捨てた人間そのものの中に、人間を人間とする輝きが存在するという。「人になれ」とはそのようなものに目覚めて生きることではないのだろうか。

第2巻第3章は「教育」を論じている。ここではトイフェルドレックが受けた教育を扱っているが、カーライルが受けたイギリスの教育を批判しているともできる。これを手がかりとして、新渡戸は自分が受けた、あるいは、その後、見聞した日本の教育を論じている。

「彼は言う、『私の先生たちは融通の利かぬ術学者で、人間の本性も、少年のそれも知らず、いな辞書と、四半期ごとの会計帳簿のほかは何も知らなかった。』」

しかも「（教授たちは）樺の木の手をういて皮膚筋肉から教えることができると考えていた。」

ここでは、当時の権威主義的な教師像と、教師としての真の使命感を忘れた教師、人間理解を欠落した人間性のない教師の現実が指摘されている。

第2巻第9章は「永遠の肯定」と題されている。新渡戸はこの部分が本書の真髄であるという。

「トイフェルドレックは叫ぶ、『荒野の誘惑！われわれはみなそれによって試みられなければならない。生まれながら我らのうちに宿った古きアダムをそうやすやすと追い出すことができない。…しかし人生そのものの意義は、自由にほかならない。自由意志から出た力（Voluntary Force）にほかならない。』それゆえ我々には戦いがある。特に最初は苦戦する。なぜなら神から与えられた命令『あなたがたは、たゆまず善いことをしなさい』（II テサロニケ 3:13）が、われらの心のうちに不可思議にも預言者の火の文字をもって記されている。そしてそれが読み取られ、守られ、目に見えるように実行され、自由の福音として、行為において光を放つまで、昼となく夜となく、われわれに少しの休息をも許さない。」

さらに新渡戸はこう付け加えて言う。

「人生というものは必要（Necessity）という境遇の中に囲まれているけれど、…人生の本当の意味は Freedom

すなわち Voluntary Force で、自己自分の判断でやり、責任をもって自分でやることである。」

トイフェルドレックは一種の「回心」を経験した後、新しい目をもって人間を見るようになった。「私は別の眼をもって私の同胞を見ることができるようになった。すなわち無限の愛と無限のあわれみをもって。」人間蔑視や、差別ではなく、連帯と共感を持つにいたったという。

彼はこうも付け加える。

「確信はいくら立派なものでも、行為に移されるまでは、何の役にも立たない。いや、本当を言うと、確信はそれだけでは不可能である。」

高邁な理想主義は飾り物ではなく、実践されて初めて生きるという。そして文豪ゲーテの言葉を引用する。

「ある賢人がわれらに教えてくれるように、『どんな種類の疑惑でも、行為によらなければ、これを除くことができない』というのは真実である。それであるから、暗闇や覚束ない光の中で、気の毒にも手探りをし、夜明けが明けきって昼になることを一生懸命に祈っている人は、私には千金にも換えがたいほど役に立ったこのもうひとつの教訓を心に銘ずるがよい。自分の義務であると知る『最も手近かな義務を果たしなさい』」。

この「最も手近かな義務を果たしなさい」は横浜バプテスト神学校の創始者アルバート・アーノルド・ベンネットが座右の銘にしていた。ベンネットはこの『衣服哲学』読んでいたのか、あるいは、もともとの出典であるゲーテの『マイスター・ヴィルヘルムの修行時代』を読んでいたのではないだろうか。興味深い。

この章の結語には、私たちに積極的に訴えるものがある。新渡戸はこれを引用している。

「私もこう言いたい。混沌(a Chaos)はあってはならない。秩序ある世界(a World)、小さな世界(Worldkin)でもつくれ。作り出せ！作り出せ！どんな小さなものでもいいから作り出せ。神の名においてそれを作れ。それがお前のできる精一杯のものだ。それを進めよ。起て、起て。何でもお前の手でできることを全力でなせ。今日といわれる間に働け。夜が来れば誰も働くことができないから。」

それぞれの人間に足元から何事かをはじめよという。これは坂田の「奉仕せよ」に通じている。

結語

演出家の竹内敏晴はカーライルの『衣服哲学』や、ゲーテを読んでいたことが、彼の著作（『《出会う》ということ』）から推測できる。彼はそれから得たものを今日の言葉で言い換えてくれている。

「世界はわたしのからだの延長であり、『わたしのからだという布地で仕立てられている。』」

「世間一般の人は、他の人と、ことばによってふれあおうなどとしていないということだ。世間の人は、むしろ

他人と距離をおき、自分が傷つかないようにかくすためにことばを使う。自分を誇示するために装い、飾り、防衛のために、ことばの弾幕を張っている。」

竹内は、教育学者の林竹二と共に、恵まれない若者たちのための教育活動をしたことがあり、林がソクラテスから学んだ「ドクサの吟味」という手法に注目して、竹内はこうも言う。「ドクサ」とは、真の認識に対して、低い主観的な認識、臆見、ここでは「衣服」とも理解できる—筆者注)

(ソクラテスは)「魂を委ねて、裸になって、裸になったその姿をまじまじと自分が見ることだという言い方をしています。」

「その時、自分が裸にされて、裸になって、相手の目の前に立っているわけですね。その自分の姿を見たときに、その人は非常に自分を恥じる。ソクラテスはその恥ずかしくなったところから、人は新しく歩みを始めると信じていた。そこから人は新しくなるということに、彼の方法があったわけですね。」

竹内は戦中・戦後を生きた自分史と重ねながら、私たちに自分のあり方を吟味することを論じている。

「1945年、第2次大戦による日本の敗戦に打ちのめされた私たち青年が、ぶち当たったのは、この問いに他ならなかった。大日本帝国国民、天皇陛下の赤子という世俗的な身分ではなく、国家権力を超え、『人格』とよばれ、『人権』をもつ存在を成り立たせるものはなにか。この問いは地下の伏流水の如く今も動いている。」

坂田が「人になれ」と若い人たちに語りかけたとき、虚飾、衣装、制服さらに肩書きを脱ぎ捨てて、謙虚になって裸の自己を見つめ、再出発すること、人として、自分はいかにあるべきかを絶えず問うことを勧告したのではない。「人」は完全へと向かって絶えず形成されねばならない。「奉仕せよ」はカーライル(トイフェルスドレック)も認識するに至ったように、真に自己に目覚めたものは、他者に向かう。しかも他者を征服するのではなく、他者を「汝」としての存在であると認め(ブーバー)、他者を生かし、立たせ、共存へと向かわせる。しかも他者を真に発見することは、次に自己を見つめさせるに至らせる。自己形成と他者奉仕が相互循環的になっていることがわかるであろう。坂田祐はこのことを新渡戸の講演から学んだのではないか。

新渡戸稲造の教育思想

新渡戸稲造(1862 - 1933)は南部藩士の子として盛岡に生まれた。父親は彼が6歳の時に亡くなった。彼は10歳の時に、叔父、太田時敏の養子になった。幕末に南部藩は坂田祐の出身であった会津藩と同じく徳川幕府についたので、明治維新政府の本流に属することはできなかった。稲造は1873(明治6)年から4年間、東京外国語学校に学び、1877(明治10)年に16歳で札幌農学校

に、第2期生として、内村鑑三らと共に入学した。そこで稲造は「イエスを信ずる者の誓約」に署名した。1881(明治14)年、20歳で同校を卒業、2年間、北海道開拓使御用掛として勤務後、東京帝国大学に入学した。この時期に、彼は「われ太平洋の橋とならん」という言葉を残した。1884(明治17)年、23歳で渡米して、ジョンズ・ホプキンス大学に3年間学んだ。留学中に彼はフレンド派(クエーカー派)に加わった。このキリスト教の教派は平和主義を奉じていることで知られている。1884年は、関東学院の前身校、横浜バプテスト神学校が創立された年でもある。1887(明治20)年、26歳で、ドイツに渡り、ボン大学、ベルリン大学、ハレ大学に学んだ。1889年に彼の実家の長兄が亡くなったので、彼は新渡戸姓に戻った。彼は1891(明治24)年には帰国して、母校の札幌農学校教授となった。農学はもとより語学の科目まで率先して担当したという。

1901(明治34)年に、台湾総督府技師、後に同殖産課長に就任した。翌年には台湾総督府糖務局長になった。彼は台湾を有力な砂糖の生産地とするために貢献した。

1906(明治39)年に第一高等学校長に就任、1913(大正2)年までこれを務めた。中学関東学院の初代学院長、坂田祐はこの時期に第一高等学校で学んだ。その後、新渡戸は東京帝国大学教授として、植民政策を講義した。

1918(大正7)年に東京女子大学初代学長になった。1920(大正9)年には戦前の国際連盟事務局次長に就任。1926年までジュネーブを拠点にこれを務めた。1933(昭和8)年8月に第5回太平洋会議に日本代表としてカナダに向かった。実は、この時期に日本は彼が尽力していた国際連盟を脱退し、戦争態勢へと向かっていた。同年9月に彼はビクトリア市で客死している。

新渡戸稲造の教育活動は多岐にわたる。ここでは「遠友夜学校」に注目したい。これは「朋有り遠方より来る。また楽しからずや」(『論語』学而篇)に由来する。「朋」は「友」のことである。この学校は新渡戸夫人のメアリー・エルキントンの関係者の遺産を基金として始められた。正規の学校へ行けなかった人たちに、ここで学ぶ機会を提供したのである。この学校は月謝を取らなかった。札幌農学校の教師と学生、後には北海道大学の教師と学生がボランティアで教えた。ここは、本当に学びたい人たちだけが来て学ぶ学校であった。この学校は約50年続いたが、戦時下の1943(昭和18)年に閉鎖された。しかしこの間、ここで学んだ者の数は1000人に達したといわれる。

「遠友」つまり「遠方より来る友」とは、キリスト教的な背景から解釈すると、貧しくて正規の学校に行けなかった人たちのところに出かけて行って、友となり、教えるという働きである。それはイエス・キリストのなしたことであり、彼に続く多くの弟子たちの働きであった。「全世界に行って、すべての造られたものに福音を述べ

伝えなさい」(マルコ福音書 16:15) そこでは、教える側は直接に社会の市井の人々に出会い、そこで教え、そして学校に戻って、その経験を踏まえて、より深く学問を追求するにいたった。教えを受ける側もそこで心から学び、日常生活と仕事にこれを活かすことができた。

新渡戸稲造の研究者、佐藤全弘は新渡戸が理想とした教育を次の3項目にまとめている。それを紹介しよう。

(1) 「知識」

日本の「教育の多くはあるきまり文句を教えられた通り機械的にくりかえすことであって、その意味については、若い魂は何一つ解っていないのである」と新渡戸は言う。これはカーライルの『衣服哲学』がドイツを一つの例として取り上げて、実は英国の教育について指摘したことであった。教育は地位を得る手段となったために、知識偏重が起こった。しかし新渡戸は知識よりも常識・コモンセンスを尊重せよと訴えた。

(2) 「実行」

新渡戸が札幌に設立した「遠友夜学校」の跡地には、今は中央勤労青少年センターが建っている。そこには新渡戸記念室がある。その部屋には新渡戸の「学問より実行」という書が掲げられている。これは学問否定ではなく、本当に実践してみて、知識は身につくと教えたのである。カーライルの『衣服哲学』の中の言葉、「汝の最も近くにある義務を行え。そうすれば、次に義務がすでに明らかになるであろう」という言葉も、佐藤はここで引用している。

(3) 「人格」

新渡戸は、日本の教育の中でもっとも欠けているのは、人格教育であるという。大事なことは、その人が人間として、人格として、どの一人も皆神から与えられた命を生きていることであるという。これは坂田祐の「人になれ」の校訓に接点を持つのではないか。新渡戸は、最初は封建領主のお殿様のために、次に立身出世のために、続いて国のために努力したが、やがて全人類のため、そして宇宙と相通う神のためにと、生涯の目標を拡大し高めていった。

新渡戸の訴えは、世界の市民としての自覚を持って、世界の苦しむ人たちのために如何に伝えていくか、遠大で、しかも緊急の課題を意識して、幼少年の時代から、学んでいく魂を育てていかなければならないということであった。

岩波文庫に『新渡戸稲造論集』(2014年第3刷)がある。その編集者、鈴木範久は巻末の解説の中で貴重なコメントを記している。これは坂田の教育思想と校訓の淵源を探るうえでも、有意義であるので、ここに引用させていただく。

「新渡戸は、近代日本の教育のありかたを憂い、人間

ひとりひとりの人格の価値を執拗に説いた。知識の詰め込み、試験のための勉強、受身的な国家の器械のみを作る型にはまった教育に対し、知識より品格、理屈よりも実行、受動的な人間よりも自発的な人間の育成を目指した。

そのためには、先ず教育者の側に課題を見出し、小手先の教育技術を身につけるのではなく、広い教養、人類の視野、高い理想を繰り返して語っている。新渡戸の教育観は同時に教育者観でもあった。あえて加えるならば、教育行政者観でもある。その教育理念は、親しく影響を受けた人々により、戦後の教育基本法の制定となって結実する。」

1919(大正8)年4月に中学関東学院が発足した。その第一回の入学式にあたり校訓が告示されたが、その言句のみにこだわることなく、坂田が中学関東学院において実践しようとした教育の理念は、新渡戸の教育理念に合い通じるものが多い。ある意味では、坂田はこの新設の学校において新渡戸の教育理念の路線を自分の手で実践しようとしたことにより、戦後の憲法に基づいた教育基本法の精神を先取りしていたとも言える。

以下は、新渡戸が1919年(中学関東学院開設の年)までに、さまざまな機会に各所において、教育について論じている著作に注目して見たい。

「今世風の教育」(1903年)

これは雑誌『青年界』に掲載された。開口一番、新渡戸は当時の日本の教育について辛口の言葉を披露している。

「私が始終青年のために憂っていることの一つは、概して日本の青年は薄っぺらであるということ。書物を読むにいささか文字を頭に入れるというだけに止まって、その文の精神を解することを力めないし、甚だしきはその意味さえも理解しない者が多い。…これは青年のみならず教師が悪いのであって、教師がややもすれば、半解であって、教えることを自ら消化していない。」

「私の惜しむことは、倫理科で教えることも、理屈を教えることに止まって、人間の行為の動機を定めることが少ないと思う。故に道徳のことに就いても、小理屈が大変に多い。…倫理的の行為は我輩議論だとは思わない。実行だと思う。」

これは教え(思想)と実践が乖離してはいけないということである。つまり「人になれ」と「奉仕せよ」を分離してはならないということである。

「我が教育の欠陥」(1904年)

これは英文雑誌 The Student に掲載されたものである。このタイトル自体もなかなか挑発的である。日本の教育を新渡戸はいたく憂っている。ここの言葉は、

彼にして初めて言えることかもしれない。しかもこれは教育の携わるものの自戒として受け止めるべきものである。

「今日の教育たるや、吾人をして器械たらしめ、吾人よりして厳正なる品性、正義を愛するの念を奪いぬ。一言にしていわば、これぞ我祖先が以て教育の最高目的となしたる、品格ちょうものを、吾人より奪い去りたるものである。」

ここの「吾人」とは「われわれ」という意味であるが、転じて「人間一般・学生・生徒」を意味させている。「器械」とは「道具」「器物」のことである。そうすると新渡戸は、我国の教育が主体性を育てる教育ではなく、受動的な道具を作る教育になっていると指摘する。坂田の「人になれ」は、主体性を育てる教育を目指していた。そして「強いられてではなく」、「自発的な」「奉仕」へと、学ぶ者を向かわせるものであった。

「教育の目的」(1907年)

新渡戸は1906年に第一高等学校校長に任じられている。その学生たちは一般大衆を低く見るエリート意識を誇っていた。そこで教育のために、新渡戸は彼らに「社会性」という新たな識見を与えようとした。

「亜米利加は何のために大いに普通教育を盛んにしているかという、即ち良国民を育てることがその目的である、よく国法を遵奉する国民を造るのである。…先ず国家の組織あるいは公益ということを知り、大統領を選ぶときにも、村長を選ぶ時にも、必ず不正不潔な行為をしてはならぬ、国家のため、一地方のためだという考えを以て、投票するような国民を養成したいというのである。」

「僕の考うる所に拠れば、教育は言うに及ばず、また学問とは、人格を高尙にすることを以て最高の目的とすべきものではないかと思う。…学問の最大かつ最高の目的は、恐らく人格を養うことではないかと思う。」

「今日は学問の弊として、往々社会に孤立する人間を造り出す。かのギッゼングスの社会学に『ソシアス』(Socius)という語があるが、これは『社会に立って、社会にいる人』の意である。…われわれは決して孤立の人間になってはならぬ。あくまでもこの社会の活ける一部分とならねばならぬ。」

新渡戸は教育の役割として「良国民」の育成、「人格」の涵養、「社会性」(Sociality)を培うことを強調する。

「教育家の教育」(1907年)

「世間では教育屋などという者があるやに聞いている。こういう人は学校を造って金を儲け、あるいは卒業証書を買って自分の生計を営む、あるいは少しばかり覚えたことに勿体を付けて、これを他の一層未熟な人に売り付けるのが教育屋であるということを度々聞きました。然るに教育家というものはそういう者ではあるまい。」

「私の要点は、どうか教育に志す以上は吾々が教育家たるの資格を具えたい。その資格とは即ち免許状の有無ではない、志と力の資格を具えたい。」

「児童に触れるに当たり、これを紅に彼を黄色に化するというのは児童の銘々の力を発揮せしめるのであって、天賦の力を啓発せしめるのが即ち吾々教育家の任務である。」

「まだまだ深く潜める無限の精神を開発することは吾々教育家も未だ力を込めんように私は感ずる。」

児童の中に潜むそれぞれの個性と能力を見つけ、それを伸ばすことこそ、教育に携わる者の使命なのであるという。

「教育の最大目的」(1912年)

「教育とは『活ける人間を造る』との一言に包含することが出来よう。」

「故に教育の目的は如何に深遠なる学理の研究研鑽を積むも、常識圏外に逸する事なく、研学の歩を進むと同時に、かつ社会を離れず、いわゆる世と推移り時世の進歩傾向を知ると共に、活社会に処して活動するの能力を養うこそ教育の最大目的なるべけれ。」

「要するに教育者が注意すべきは、活ける社会に立ち万国に共通し得べく厳正にして自国自己及び自己の思想に恥ぢず、実際の人生に接して進み、世界人類に貢献する底の人物を造る事に在るなり…換言すれば実行的活動的人物を造ることである。」

新渡戸はすでに取り上げた教育の「社会性」を拡大して、ここでは教育の「世界性」を加味し強調している。

「教育の基礎は広かるべし」(1912年)

「教育の基礎は広く考えると、個性を發揮し、人の衷にある最上のものを抽出するというにあることは疑いを要さない。謂わばその人の有っている潜在能力を悉く顕わして、これを社会のために有用なものとするのである。」

「社会に有益なる任務に適応したる人を造るに最も有効な方法は、その人の執る職業の如何にかかわらず、先ずその個性を發揮するにあることは何人も否定しないところである。」

「余が教育の理想は、先ず個性を充分に發揮し、社会の要求に応じて如何なる職務にも適応する人を造ることである。…もしまた、目前の社会に自分の入る所を発見せなければ、自らの努力で働くべき場所を造り出すだけの実力を備えるように教育せなければならぬ。かくの如くすれば、自ら活動の場所を発見し、また前人未発の方法を考案して社会に貢献することが出来るであろう。」

坂田の強調する教育の理想としての校訓の背景は、この新渡戸の教育思想の中に明瞭に見出すことができる。そしてここからも、新渡戸の教育思想はカーライルの『衣服哲学』から多くを汲み取っていることがわかる。

校訓「人になれ 奉仕せよ」とセツルメント活動

—故富田富士雄先生を通して生きる関東学院マインド—

関東学院大学名誉教授 小林 照 夫

富田富士雄先生流教育論を学ぶ —小林は漁業組合史の執筆を通して 富田門下生に—

私自身、関東学院大学、大学院経済研究科修士課程の出身であるが、学生時代は経済史に関心があり、富田先生がご担当の社会学や社会変動論等の講義を受講することがなかった。そんなこともあってか、学生、院生時代は、「先生は関東学院大学ご出身の教授」と伺いながらも、先生の研究室をお訪ねすることはなかった。

本学の修士課程を修了し、本学文学部の研究助手に採用され、社会学の先生方とも面識を持つことになり、富田先生には指導を頂いた。私が採用された時には文学部が開設されて2年目のことだったので、先生方は開設当初からの人たちばかりであった。富田先生が社会学の学科長で、先生の尽力によって社会学が誕生した。教授陣には、全国社会福祉協議会の事務局長を務めた福祉の牧賢一教授、社会病理学の渡部一高教授、社会思想史の宮島肇教授といった先生方が、非常勤では現在神奈川県立保健福祉大学名誉学長の阿倍志郎先生、社会思想史の早瀬利雄先生をはじめ社会学や社会福祉の領域で活躍されている先生方がおられた。その先生方から富田先生のお人柄と先生の学問に対する情熱についてのお話を伺った。私は先生方のお話を通して富田先生像を描いた。

開設当初の先生方が定年退職され、その後任枠で、現在山形大学名誉教授の内藤辰美先生が赴任されてこられた。内藤先生と年齢が同じということもあって、親しくお付き合いをさせて頂き、先生から事あるごとに富田先生の人口社会学等のお話を伺った。内藤先生のお陰もあって、富田先生の学問が少しずつ理解できてきた。

富田先生は大学を定年退職されてからも生涯研究者を貫かれた。1983（昭和58）年2月、74歳の時に、有隣堂から『社会問題の社会学』を出版され、1995（平成7）年には、やはり有隣堂からであるが、『コミュニティ・ケアの社会学』を刊行され、天に召される前年1998（平成10）年、89歳という高齢でしたが、日本社会史学会の機関誌『社会史研究』に「二世紀社会学の課題」を投稿されている。その現役研究者富田先生から、「小林さん、貴方は歴史をやっているのです、少し手伝ってほしいことがあるのだが」というお話を頂いたのは、先生が80歳少し前の頃かと思う。その富田先

生に「柴の漁業協同組合の人たちと一緒に漁業史を纏めてくれないか」といわれた時には、自分の浅学の恥ずかしさからたじろぎを覚えた。先生からお話を伺ううちに、自分自身が学べるということでお引き受けした。富田先生の門下生小林はその時誕生した。

私の金沢文庫キャンパスの研究室に、柴漁業協同組合の貴重な史料（資料）が運び込まれてきた。研究室に史料（資料）が揃ったことで、関東学院大学時代富田先生のゼミ生だったという漁業協同組合の若手理事小山紀雄さんをはじめ数人の漁師さんたちとの勉強会がはじまった。既に、彼らは、富田先生を囲んで、組合史刊行の勉強会をはじめていたので、私が彼らと出会った時には、彼らには組合史を描き上げるための歴史意識が醸成されていた。富田先生ご自身も、「この沿岸漁業の歴史は柴漁業史に留まらず、横浜という近代的大都市の側面を描き出すものでありたい」と話され、そうした視点から、私たちの作業を見守ってくださった。その成果物は、1990（平成2）年5月に、富田富士雄、小林照夫、柴漁業協同組合史編集委員会編で刊行された。書名は、故細郷道一氏の横浜市長時代の筆による柴の記念碑に刻まれた言葉を頂き、『蒼穹の下漁鱗耀けし地—柴漁業協同組合—』とした。

その作業の折、先生の極々日常的な言動を通して人が育っていることを知り、学問論を振りかざすことのない富田流教育を学んだ。先生のお話の中には関東学院がたびたび出てきた。そうした話を通して、先生の少年時代、関東学院創設者坂田祐先生、専門学校教授渡部一高先生のことなどを伺った。

富田先生と関東学院 —先生はセツルメント活動を通して 校訓を実感—

富田先生は身体に障害があったので、公立の旧制中学校の進学が許されなかった。そのため、小学校卒業後関東学院英語学校に入学した。富田先生のお話では、その英語学校在学中に関東学院の創立者坂田祐先生と出会い、先生から、「関東学院中学校は身体に障害があっても勉強する気があるなら、入学できるよ」といわれたそうだ。その坂田先生の言葉が富田先生の生涯を変えた。

富田先生は関東学院中学校の編入試験を受け、合格し、三年生に編入した。1929（昭和4）年、19歳で、旧制中学校を卒業し、三春台のキャンパスにあった旧制

の専門学校、関東学院神学部に進学した。当時関東学院の神学部は五年制で、予科の社会事業部が三年、本科が二年という構成になっていた。富田先生は専門学校の学生時代にセツルメント活動に係わった。

セツルメント活動の源流は、1884年のEast End（ロンドンのシティーの東側）のホワイト・チャペル地区に設立されたアーノルド・トインビー（Arnold Toynbee、死後1908年に刊行された『産業革命に関する講義』（*Lectures on the Industry Revolution*）は産業革命を学ぶ古典的著書）を記念して、1884年にサミュエル・バーネット（Samuel Barnett）によって開設された。当時のイースト・エンドは産業革命期に拡大したイングランドを代表するスラム街ということもあって、そこでのセツルメント活動は大きな成果をもたらした。そうした経緯があって、その活動はアメリカをはじめ多くの国々で展開をみた。

日本でのセツルメント活動は、1890（明治23）年に萌芽し、大正デモクラシーを背景にして、大正の後半期に本格化した。セツルメント活動の動向は、第一には宗教団体、第二には公立セツルメント（公共施設として）、第三には大学セツルメント、と大きく三つに分類できた。その日本でのセツルメント活動の推進者の一人に片山潜がいる。彼はアメリカ留学中にセツルメント運動に共感し、帰国後、ダニエル・クロスビー・グリーン（Daniel Crosby Greene）の支援を受けて、労働運動や生活協同組合運動の先駆者である高野房太郎と共に、1897（明治30）年、神田区三崎町の自宅を改良し、キリスト教社会事業の拠点としての日本人最初の隣保館「キングスレー館」（牧師、慈善家、小説家であるKingsleyに因んで）を開設した。

大学等の高等教育機関でのセツルメント活動ということでは、1920（大正9）年～30（昭和5）年にかけて、東京帝国大学、関東学院、明治学院等の高等教育機関で行われた。当時は皇国史観に基づく国家運営が行われていたこともあって、関東学院のようなキリスト教主義学校は厳しい監視下に置かれていた。そのために、関東学院のセツルメント活動は社会改良主義を前提にした危険思想に基づくものだと中傷されることもあった。そうした厳しい状況下ではあったが、関東学院のセツルメント活動は、バプテストの思想の根幹をなす「神の下における人間の平等」を前提に、Not to invite, but to goをモットーに展開された。その活動は「キリスト教の信仰と社会実践」の場であった。

当初の関東学院のセツルメントの活動は南太田を中心に行われた。そこでの活動は、地域改善策の一環として、就労の世話・子育て支援・日雇労働者のための労働問題や社会問題を学習する夜間講座、また男子には健全な娯楽と運動の指導、女子には家庭生活に必要な料理や裁縫、子供たちには行儀作法、学習の補習、その他「土曜学校」や「日曜学校」をはじめ学芸会・運

動会・クリスマス会等に及んだ。

その後、活動の母体を南太田から浦島町に移すことになり、会館が必要になった。会館建設資金を集めるために募金活動を行うことになった。専門学校の渡部一高教授は、「一部有力者の大口寄付より、僅かな額ではあるが大衆から受ける支援、協力に意義があり、そのことが、我々の事業を広く知ってもらうことになる」ということで、「十銭袋募金」を提唱した。『関東学院百年史』には、「十銭袋募金」をお願いする縦の茶封筒の表に、次のような記載があったと記述されている。「炬火は燃えたり、友よ、愛を注がずや、この袋こそ貴方と我が不遇の同胞との手を握らせませう。お互いに手を握る時愛の炬火は燃える。愛の火で地上の悲惨事を一つ一つ焼き尽そう。此袋に十銭貨幣一個を御入れ下さい。この袋二万枚集まれば、関東学院セツルメントが出来上ります」と。

募金活動は順調に運び、1931（昭和6）年4月25日に、150坪の土地を有する50坪の木造平屋建ての会館、「前進館」が開設された。開館したその日から、自暴自棄になっている人たちが集まった。彼らには物質的援助も必要であったが、渡部教授は彼らに立ち上がる勇氣を持たせるために、労働問題の講座を開設した。その他にも職業相談・斡旋、健全な娯楽と運動、学業の補習、女子に対しては渡部教授夫人が料理、裁縫、行儀作法等を担当し、社会事業部、神学部、商業部の学生に係わった。

その活動は、キリスト教の教えに基づく強い使命感による人の育成を願うものであり、奉仕活動に生きた横浜バプテスト神学校（関東学院の源流）創設者A・A・ベンネット先生（Albert Arnold Bennett、彼の墓石にはHe lived to serveと刻まれている）や関東学院創設者坂田祐先生の「人になれ 奉仕せよ」の実践例になった。富田先生は、学生時代のセツルメント活動を思い出しながら、渡部先生の生き方に敬意の念を抱き、「先生は偉大な教育者だった、学生達だけではなく、多くの成人男女が先生の周りに集まってきて教えを受けていた」と述懐したことがある。学生時代の恩師、渡部先生の教えも富田先生の社会学の大きな支えになった。

関東学院で育まれた富田先生の社会学 —先生の社会学は校訓の内実化—

身体に障害があった富田少年の関東学院、坂田先生との出会い、関東学院社会事業部時代の渡部教授を通して学んだセツルメント活動の体験、神学部時代のSCM運動（Student Christian Movement=キリスト者学生運動）、その一つ一つが富田社会学の根幹をなした。教育者としての富田先生は温和な先生だが、邪まな権力に対しては毅然と立ち向かう。そうした強い精神的基盤は、SCM運動に係わっていたことで戸部署

に不当に拘留されたことによって培われたのかも知れない。先生は戦前のことについてはあまり語らないが、「SCM 運動に直接身を投じたことによって、社会変動の過程の中で、人間の主体性の意味について考えざるを得なかった」と述べておられる。

元本学経済学部教授で学院宗教主任であった高野進先生が「富田富士雄先生」（『関東学院学報』No.29）で記述しているように、富田先生が常々話されていたことは、「坂田先生によって指導されてきた関東学院に学び、『人になれ』ときかされて、『人とは何か』を追求し、『奉仕せよ』といわれて、社会のなかでの人間の生き方を考えざるをえない立場に置かれた」ということであった。そうした関東学院での教育があつて、富田先生の理論的且つ実践的な社会学が培われた。それは、坂田先生に学び、校訓「人になれ 奉仕せよ」そのものの内実化によるものであったといえる。

富田先生は横浜市から色々と相談を受けていたが、とりわけ飛鳥田市政時代（1963-1977）には富田先生自らが積極的に係わりをもった。その時代の富田先生の業績に横浜市の福祉がある。先生は横浜市の先進福祉の基盤づくりに重要な役割を担ってこられた。その一つは富田先生が委員長で推進された「福祉の風土づくり」である。その取り組みは1974（昭和49）年にはじまった。そこでの基本理念は、社会福祉は住民による主体的な地域福祉活動に基盤を置いてこそ真の実現が可能になるとしたもので、そこでは福祉を特定者のものとした考え方を改めることが前提になった。そうした先生の理念の基本には、福祉は特定の人のものではなく、市民全員のものだという考え方があった。それは現在のような少子高齢化の時代を予測していたかのような福祉理論の展開であった。先生がそうした視点で市民福祉を捉えたので、①市民間に社会福祉の関心と理解が高まり、②市民と行政が協力して福祉のための生活環境整備（高齢者・子供・障害者等すべての市民が一体となって生活できる横浜市にする）がはかられ、③そのための福祉の風土づくりの芽が育ち、横浜市が日本の先進的福祉都市として育成されたともいえる。

富田先生にとっての富岡・金沢地先埋立問題 —先生が大切にされた都市社会の中の コミュニティの在り方—

富田先生は既述の福祉問題だけではなく、飛鳥田市長の施策が「200万都市のまちづくり」に向けられたこともあって、市長が提言した六大事業（プロジェクト）にも係わりをもつことになった。その六大事業は1965（昭和40）年に発表された。事業の中身は、①市街地中心地区強化事業（街中の住工混在地区の解消）、②富岡・金沢地先埋立事業（人工浜、工業団地、住宅地、交通用地の整備）、③港北ニュータウン建設事業

（生産緑地と都市の共存）、④高速道鉄道建設事業（地下鉄建設）、⑤自動車専用道路の整備（人と車道の分離・高架道路の半地下構想）、⑥横浜ベイ・ブリッジ建設事業（港湾貨物の専用道路輸送）である。富田先生はとりわけ②の課題と係わりをもった。

②の課題は、富岡・金沢の埋立が漁師の生活と結びつくだけに、彼らへの漁業補償が問題になった。その補償は単に金銭の問題だけではなく、漁師の漁業権の喪失と彼らの転職問題を包含するものでもあった。飛鳥田市長自身も、単なる金銭補償の問題だけではなく、漁師の将来の生活を考えていたので、そうした問題の対策会議の委員長の任にあつた富田先生は、当然にして重責を背負うことになった。

富田先生が係わつた「対策委員会」や「漁業者等新組織対策研究会」は、横浜市に対し提言を行った。横浜市はその提言に基づき、生活の安定に資する転業者の自主的組織として「横浜市臨海環境保全事業団」を組織するとともに、金沢・柴・富岡・本牧の既存の各漁業協同組合の解散と同時に、これらの漁業協同組合の残存漁業者及び市内に残された他の漁業者を含め、漁師一本化の組織としての「横浜市漁業協同組合」を設立した。そうした形での問題の解決の背景には、富田先生自らのコミュニティ理論の実践の場として、現場に足を運び、漁師との対話を大切にし、彼らの気持ちを理解する中での対応、そうした先生の姿勢が漁師との間の信頼関係を構築した。

柴の漁師が、漁業権問題に関係した富田先生に漁業協同組合史をお願いしたいということになったのは、富田先生が優れた社会学者であることはもちろんのこと、漁師一人一人に向き合い彼らの立場を理解しての対応、そうした先生の温かいお気持ちを評価してのことであった。別言すれば、先生の学問の高さとお人柄ということになる。

私は定年退職後も、新入学生向けのキャリアデザイン「関東学院の建学の精神」の講義に係わりを有してきた。その時の講義には、「関東学院の教育を通して培われた」と自負されていた富田先生が登場する。先生の学問と業績、その一つ一つが建学の精神を反映していることから、講義は学生だけでなく、私自身の関東学院での学びを振り返る大切な機会にもなっている。

学生時代富田先生のゼミナールで学ばれた故永島敬識先生（元関東学院常務理事、本学名誉教授）は、富田先生の追悼の辞で、先生を偲び、「先生は学者であることだけに満足されなかった。一市民として一研究者として社会活動に、そして行政に深く係われ多方面の活動をされたが、本質的にはキリスト教信仰に支えられた学究者であった」と。そして、私自身、先生が「私は関東学院で育てられた人間だからね」と仰るたびに、私は富田先生と関東学院の建学の精神を合わせ鏡にして頷いた。

関東学院セツルメントの活動について

元学院史資料室 主幹 三 浦 啓 治



▲夜学校 授業風景

学院は創立100周年の記念事業の一環として、史料による学院の歴史を紹介しようと、大学図書館ホールで「関東学院 100年のあゆみ」展を

1984年11月14日から12月13日の期間開催した。

展示の柱の一つとして、学院の建学の精神である「人になれ 奉仕せよ」の実践活動である「関東学院セツルメント」の資料を展示することになった。

セツルメントとは都市の貧しい地区に定住して、住民と触れ合いながら教育、保育、生活指導を通して住民の生活向上のために助力をする奉仕活動である。

学院セツルメントは、1928年3月から学院近くの南太田にある庚耕地の谷戸で始めたが、その地域が横浜市の不良住宅地域に指定され、10月からは神奈川区の浦島町に移り、1937年3月までの10年間活動した。

学院セツルメントの目的は、「本学院創設の主旨を徹底させ、併せて本学院社会事業部（専門学校令に依る）学生実習のため」と、他のセツルメントは団体や学生ボランティアによる活動が多いが、学院セツルメントは学院の建学の精神である「奉仕」の実践として、社会事業科のカリキュラムの一環として行われた。学院セツルメントは福祉関係者からも高く評価され、神奈川県から社会事業助成金も下附されている。

セツルメント資料収集のために、指導者であった故渡部一高教授の奥様の花子夫人に資料を拝借することが出来た。花子夫人も渡部を助けてセツルメント活動に参加された方で、裁縫を教えたり、夏の子供たちのキャンプの指導にあたられた。また、セツルメントに参加された学生達をよくご自宅に招き食事を催された。

夫人によると渡部は晩年ご自分の資料を整理された時、他の多くの資料を廃棄したがセツルメント関係の資料は大事に保管されたとの事で、その資料一式をお借りできた。後に夫人はこの資料の複写を許可してくださり、『関東学院セツルメント記録』として製本された。現在は学院史資料室に所蔵されている。

セツルメント指導者渡部一高教授

渡部の業績については高野進名誉教授が、『関東学院

学院史資料ニュース・レター16号』に詳細に紹介している。

渡部は、1927年4月アメリカ、ヨーロッパでの留学を終え、学院に高等学部が創部されると、社会事業科の社会学担当教授として招聘され、社会事業科科长に任命された。

渡部はセツルメント活動をコルゲート大学留学中に経験しており、学院の教授に就任すると、翌年の3月からセツルメントを社会事業部の実習科目とし指導してきた。セツルメントについては、学院にはロチェスター神学大学を卒業したテンネー学院長、千葉勇五郎副学院長、友井楨教授等がいた。ロチェスター神学大学にはキリスト教の福音によって社会救済を積極的に行うべきであると主張し「社会的福音」を説いたラウシェンブッシュ教授の影響もあり、セツルメント活動に従事した多数の卒業生がいた。テンネー学院長も学生時代に貧民街でセツルメント活動の経験もあり、理解があった。千葉副学院長も積極的にセツルメントの行事に参加され、友井教授はラウシェンブッシュの「社会的福音」関連の著書2冊の翻訳者である。このように、学院にはセツルメントに対する理解者が多く、順調に活動が開始された。



▲渡部一高教授夫妻と学生

渡部は1932年6月に4年間の学院セツルメントでの経験を踏まえて、『細民教化の中心としてのセツルメントとその形態』と題した論文を書き上げ、それを社会事業協会の『社会事業』に発表している。

この論文には渡部のセツルメントに対する基本的な立場が述べられている。

1. これまでのセツルメントの問題点として、他の多くのセツルメントでは福祉的情熱が先行して、住民に観念的プログラムを押し付け、住民のニーズに対応していない状況を指摘し、「特に細民地域に於いては何一つするにしても客観的状態の徹底的調査の後に」と社会調査を実施し、住民のニーズを考慮して、住民

の「眞の要求に応ずる事業を」実行するよう主張している。

『関東学院セツルメント資料』に渡部が1928年1月より浦島町とその周辺の8つの町の428世帯1814人を対象に世帯主平均年齢、平均家人員、一日平均収入、一ヶ月平均収入、家賃、平均畳敷、平均燈火数、職業等の調査を行った記録がある。特に学院セツルメントが行われた浦島町については、92世帯、359人の生活実態は昼3畳に親子4人、職業は「日雇及び土工」が多く、天候により労働日数も月に10日しかない時もあり困窮な環境に置かれていた。このように社会調査を実施し多彩な活動計画を立案、実践している。

2. セツルメントの経営はボランティアによるのではなく、学院経営とするほうが利点があるとした。

その第一として学校及び先生という言葉に対する住民の信頼をあげている。また、学校経営の場合は「人件費は少しも要求せず予算全部を事業費にまわすことが出来る。」さらに、最大の強みとして奉仕者が学生であることを挙げている。「使命を感じた学生位真剣な努力をしてくれる者はない。彼等は電車賃自弁で毎夜セツルメントに來り身心凡てをすり切らして全部を犠牲にしてやってくれるのである。」と学院の経営とすることにより予算も奉仕者も備えられていることの利点として挙げている。

セツルメントの予算は1928年5月の「教員会議議事録」によると300円の支給とある。1932年には年間600円の予算で夏季キャンプの費用120円を引いた480円で「夜学の他合計16種の事業を行っており、実績として毎日の出入延べ人員60～100人がセツルメントに來ている。」と活動の多様化と共に予算も増額されている。

3. 大人に対する働きかけ

セツルメントは青少年を対象にした活動が多いが、渡部は2年間の活動を通して、「親を先に捕らえなければ何をやっても無駄である」と「子供に対する努力の上に尚大人に新たな力を注ぐことが重要であると、大人向けの活動にも力を集中した。そのために、父親には「労働学校」、母親には「無産婦人会」を始めた。

労働学校は1932年度の報告を見ると、生徒数25名、教師は渡部と学生4名で週3回 授業は政治学、経済学、人生問題、社会問題一般。卒業資格が授業日数3



▲労働学校 卒業式記念写真

分2以上出席する者のみが得られるので、卒業生は前回5名、今回3名と少数であるが浦島町の3割の父親が在籍している。無産婦人会は料理講習や小規模な消費組合の運営も行った。

渡部は青少年対象の活動と共に、父親のための労働学校、母親のための無産婦人会と家族全員を対象とした活動も重視した。



▲セツルメント指導者 友井楨教授

関東学院セツルメントの協力体制

学院セツルメント活動の指針は（英文を大島良雄訳で）

1. 施しでなく友情
2. 招くのではなく出向いていく
3. 全ての活動は教育的
4. 活動の中心は事務所でなく現場にある
5. 熱意無き活動と理想は空しい

後には4を削除し5に「キリスト教による人格の形成」が加えられた。

この学院セツルメント活動の指針を実行するために多くのプログラムが用意されており、そのための協力者も各方面から多く起こされた。

教員としては先に述べたようにテンネー、千葉勇五郎、友井楨を挙げたが、高等学部長の坂田祐はセツルメントに訪れ、労働学校の卒業式に出席したり、学生の慰問も行ってた。

教員のコベルは子ども達のキリスト教の集会である日曜学校の校長として夫人と共に奉仕し、また夏のキャンプに参加している。

高等商業部の学生もボランティアとして奉仕し、中学部学友会奉仕部は在校生からクリスマスに寄付金や献品を募った。また、セツルメント後援会は色々な催しものを開催し入場料等を寄付した。

この他、学院の姉妹校である捜真女学校の生徒からもセツルメントの遠足の付き添いや、バザーなどの物品など援助があった。

学院の協力団体である日本バプテスト同盟、その所属教会、宣教師達の協力があつた。

学院セツルメントの1929年の会計報告の収入を見ると、学院から費用300円に対し、寄付金が476円60銭と、寄付が学院からの収入の1.6倍になっている。

この他衣類や食料等の寄付もあり、多くの方々の理解と協力によりなされた。

故 坂田創先生絶筆文

—「寄稿 橄欖会の精神について」—

坂田 創 (中 21 回)



橄欖会創立90周年おめでとうございます。90年の長い歴史を受け継いできた多くの会員の皆さん、会を運営してきた方々、母校関東学院、その他多くの関係者の皆様と喜びを共にしたいと思います。

この節目の時に当たり創立当時の学院の状況と橄欖会の精神を考

えてみることは意義のあることと思います。

1919年(大正8年)中学関東学院が三春台に創設され4月9日入学式を挙行、第一回生147名が入学しました。新入生を前にして坂田院長は式辞の中で学院建学の精神を述べ、キリストの教えを土台とする「人になれ 奉仕せよ」を力説し、人間として全生涯を通じてその実現に努力すべき目標であると強調しました。坂田院長は当時41歳、希望に満ちた出発でした。

この第一回生が5年生になっていた1923年(大正12年)9月1日、突如として関東大震災が起こり横浜は壊滅的被害を受けました。関東学院が誇った英国風の瀟洒な校舎も一瞬の中に崩壊し、市街地からの類焼により全焼しました。教職員3名が犠牲になりました。夏休み中で学校における生徒の犠牲がなかったことは不幸中の幸いでした。

そして災害を免れた捜真女学校の校舎を借用して早くも10月15日には授業を開始し、翌年2月29日には三春台にも仮校舎が建設されて捜真女学校から戻り授業を続けました。5年生は卒業式が迫っていました。仮校舎には講堂がなかったので捜真女学校の講堂を借りて3月9日に卒業礼拝、3月10日に卒業式が行われました。この日47名が第一回卒業生として誕生しました。当時は進級審査が厳しく、震災の影響もあって入学時と比べて人数が大きく違っています。卒業式の告辞の中で坂田院長は「人になれ 奉仕せよ」を再び強調し更に次のように述べました。「わが国は戦争に勝つことを以て世界に誇っているが、武力では世界文化に貢献することはできない、人道上の貢献もできない。願わくばわが国に人道上のチャンピオンが生まれることである。願わくば諸氏自らそのチャンピオンとなれ。関東学院の兵隊山(注:元陸軍の練兵場であったのでこのように呼ばれていた)から人道の兵士、諸氏の帽章の橄欖が象徴する平和の戦士が多く出ずることを願

って止まない次第である。」震災の荒廃の中で、当時の情勢の中で語られたこの告辞は生徒の心に強く残ったと思います。

卒業式の午後横浜キリスト教青年会館ホールに場所を移し卒業生と教職員が記念昼餐会を共にしました。その後卒業生の総会が開かれ同窓会として「関東学院橄欖会」が創立発足しました。坂田院長が会長に推されて就任しました。1924年3月10日のことです。「橄欖」の名称は上記の通り平和の象徴です。

以上の経緯から考えて(当初の会則には明確ではありませんが)「橄欖会の精神」は「人になれ 奉仕せよ」「人道上のチャンピオンになれ」であると考えてのが自然であり適切であると考えます。そしてこの精神は90年間脈々と受け継がれてきたと思います。

47名で発足した橄欖会は今や21,000名を超えていると聞いております。会が大きくなると会員の交流親睦も難しいのですが、会員が関心を持ち、会の為に何か出来ないかを考えることが大事だと思います。会としてはますます充実発展し会員の為、学院の為、世の為に貢献する良い会になり創立100年に向けて前進することを心から祈ります。

その後坂田院長は米国ミッションの招きを受けて5月13日横浜港を出帆、テンネー理事長と共に訪米の途につきました。バプテスト大会に出席して5,000人の聴衆を前にしてミッションスクールの使命を強調し、関東学院の震災復興のため懸命に支援を訴えました。その後シカゴ大学の夏のセミナーを聴講し9月からは米国各地の教育施設を観察し、多くの関係者と交流を深め11月に帰国しました。このことはその後の学院の復興を進めていく上で大いに有効であったと思います。



▲坂田 祐先生と筆者(坂田記念館所蔵)

〔上掲の坂田創先生の御文章が、御絶筆文となりました。これは『橄欖会会報』のために先生がご執筆されたものですが、同会報の発行前にご召天されました。これらのことをご紹介くださり、御写真もご提供くださった橄欖会(関東学院中学校高等学校同窓会)の葛城容子様並びに坂田記念館の鍛冶多津子様、この場を借りて感謝申し上げます。(編集子)〕

坂田創 先生 告別式 「説教」

前関東学院学院長・大学文学部教授 森 島 牧 人

主にある兄弟坂田創先生は、去る2014年5月8日の夜、衣笠病院において主のもとに召され、しばらくの眠りにつかれました。坂田先生の地上の道のりは87年と7カ月でありましたが、ここにおられる方々は坂田先生の87年半に及ぶ地上の旅の中で、どこかの地点で出会い、どこかの道のりを一緒に歩いた方々であると思います。

坂田創先生は、1926年9月22日佐々木金吾、せつ長の男として生を与えられました。1944年4月16日、関東学院中学部を卒業した翌月、バプテスマを受けられました。その3年後の1947年坂田 祐、トシの養子となります。その人生の大半を関東学院のために働き、関東学院を愛し、キリストに従い、生きてこられました。数年前、癌であられることが判明いたしました。特に大きな治療をすることも無く、お元気で過ごしてられました。数日前、体調を崩され横浜南共済病院に入院され、7日に衣笠病院に転院されました。その次の日の2014年5月8日夜、弟様に見守られて、平安の内に、安心して天に召されました。

坂田創先生は、優しい方でした。どんな方にもあふれる笑顔に向けてくださる方でした。見ているこちらのほうまで嬉しくなってしまう笑顔に向けてくださいます。いつでも歓迎していただく、自分を受け止めてくれている、そう感じさせるお人柄であられました。物静かで、謙遜であられ、忍耐強い方でした。どんなときでも愚痴をもらさず、人を悪く言わず、愛を持って人と接することができる、本当に優しい方でした。そして、どんな時にでも感謝の気持ちを忘れないお方でした。

もし、坂田先生が、今ここで皆さんに語る事が出来たとしたら、きっと「ありがとう」と言われるのではないかと思います。「来てくれてありがとう。出会ってくれてありがとう。今まで一緒に耐えて過ごしてくれてありがとう。」そしていつもその根底で、「神様ありがとうございます」と、感謝の祈りをささげられると思います。そのように心から言えることは、本当に素晴らしいことで、幸せなことなであります。

その坂田先生が最も愛された聖書の言葉の一つは、詩篇23篇の御言葉でありました。

詩篇23篇は、旧約聖書に登場する偉大な人物、ダビデ王の信仰の歌です。旧約聖書の中で、とりわけすぐれた人物の代表として讃えられている一人です。もし人類に救い主が現れるとしたら、この人の子孫に違いな

いとまで言われた名君、それがダビデであります。天から駆け降りてきたような美しい風貌。王としての政治・経済・軍事、多面にわたる力量。琴を奏で、詩をつくる芸術的力量。あらゆる面においてダビデにまさる人物はいなかったのです。それほど的人物が死んだ時、しかも一国の王として死んだにもかかわらず、その葬儀において、彼はこのように紹介されました。「ダビデはその先祖と共に眠って、ダビデの町に葬られた。ダビデがイスラエルを治めた日数は40年であった。すなわちヘブロンで7年、エルサレムで33年、王であった。このようにしてソロモンは父ダビデの位に座し、国は堅く定まった。」(列王記上2章10～12節) わずか3行半、これがすべてです。これ以上のことを紹介させなかったのです。

王ダビデは自分の葬儀の日、自分の栄光が数え上げられ、自分の業績が数え上げられることを許さなかったのです。何故でしょうか。彼は自分が何者であるかよく知っていたからです。彼はもともと平凡な一人の羊飼いでした。人間的に言えば、一介の羊飼いが一国の王にまで立身出世の階段を駆け上った輝ける人物です。しかし、彼は王となってからも自分を決して見失いませんでした。彼は神の前には自分はただの羊飼いで、いやただの一匹の羊にすぎないと自覚していました。その自覚、神の前での自分の姿をダビデは美しい一片の詩にあらわしたのであります。

「主はわたしの牧者であって、

わたしには乏しいことがない。

主はわたしを緑の牧場に伏させ、

いこいのみぎわに伴われる。

主はわたしの魂をいきかえらせ、

み名のためにわたしを正しい道に導かれる。

たとえわたしは死の陰の谷を歩むとも、

わざわいを恐れませぬ。

あなたがわたしと共におられるからです。

あなたのむちと、あなたのつえはわたしを慰めます。」(詩篇23篇1～4節)

・「主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがない。」

本当は、私どもは乏しいところがたくさんあります。愛が貧しかったり、思いやりがなかったり、勇気に乏しいこともたくさんあります。欠けているものがたくさんあります。挫けそうなことは幾らでもあ

るのです。けれども、「わたしには乏しいことがない」と言えるのです。「主が私の牧者」であるからです。

牧者というのは、羊飼いのことです。弱い羊が、一人では何もできず、オオカミでも出ようものならばすぐに食べられてしまう羊が生きていかれるのは、羊飼いが一緒にいて守ってくれるからです。いのちがけで闘いから守ってくれるのが羊飼いです。この信仰の詩人は、祈りの中で歌うのです。神さまが私の羊飼いだから、わたしには乏しいことがない。欠けているものがない。すべて欠けているところは満たされている。・「主はわたしを緑の牧場に伏させ、いこいのみぎわに伴われる。」

生きていく時に必要な食べものがあるところ、それがみどりの牧場です。そこに神が私を置いて下さる。わたしは貧しくなんかない。心から憩うことが出来るところ、休むことが出来るところ、そこに導いて下さる。そこで魂を生き返らせて下さる。疲れた魂を、挫けた魂を、いつでもいのちを吹き返して甦らせて下さる。正しい道に導いて下さる。

・「たといわたしは死の陰の谷を歩むとも」。

生きていながら、誰でも、死の陰の谷を歩むことがあるであります。真暗で、先が見えず、一歩道を外せば転がり落ちてしまいそうな不安な道を歩むことだってあるでしょう。色々なことが言えますが、誰でもが必ず経験することは、死ぬということあります。ここにおられる方の中で、死なずに済む方など一人もいないのです。必ず死の影の谷を歩むことがある。けれども、その時でも、恐れる必要はない。「たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわざを恐れませんが、あなたがわたしと共にいるからです。」

神が共にいて下さる。だから恐れる必要はないのです。私どもは、ただその方の後ろに従って行けばいい。その方が永遠の命という素晴らしい希望へと導いて下さる。

・「あなたのむちと、あなたのつえはわたしを慰めます。」

この杖と鞭は、羊を痛めつけるための道具ではないのです。羊飼いは、暗い谷を歩まなければならない時、本当に暗くて分からない道を歩まなければならない時、杖や鞭を地面にたたきつけて音を出しながら歩くそうです。羊は、その音を聞くと安心するのです。暗くて、孤独を感じる時、従いたい羊飼いの姿が見えない時でも、いつでも音が聞こえる。羊飼いの音が聞こえる。バンバンと叩く音が聞こえる。その音を聴きながら、ああ、近くに羊飼いがいると感じて、深い慰めを得ていたのです。

坂田先生が、常に支えとしておられたのは、この「インマヌエル」の信仰ではなかったらうかと思えます。そして、教育の中で、信仰生活の中で、多くの出会いの中で、人々に伝えたかったことも、この恵みであっ

たと思えます。「神が共にいて下さる」とのその喜びに生きてもらいたい。絶えず祈ってもらいたい。どんなときも感謝の心に生きてもらいたい。「神が共にいて下さる。」(インマヌエル)との御言葉を聞いて、目で見るよりも確かに、心に神を感じて、生きてもらいたいと。

私どもにとって、杖と鞭は、聖書の言葉でありましょう。あるいは、賛美する歌声でありましょう。また祈る声、教会の声でありましょう。坂田先生は幸せであります。いつでも、この音を聴くことが出来たからです。お仕事が忙しくても、関東学院には礼拝と賛美がありました。そして、いつでも神のみ声の中にありました。

坂田先生がこんな言葉を残されています。

「私は神の恵みに包まれて生きてきたのです。長い人生の間には、色々な試練がありましたが、その都度、祈って道を示されてきましたので、今思えばすべて神様の御手の内にあったという思いです。人間としての最善は尽くしますが、最後はいつも『思い煩うな』という御言葉に委ねてきました。いつも「神共にいます」と信じていました。聖霊が静かに、力強く私を支えてくださると感じていました。」

「長い人生の間には、色々な試練がありましたが」とあります。多くを語られませんでした。本当に多くの試練があったと思えます。時代に翻弄された青春でした。若い記憶は戦争だけであったと思えます。坂田の家を継ぐということにも、一筋縄でいかないことが多くあったであります。しかし、「その都度、祈って道を示されてきましたので、今思えばすべて神様の御手の内にあったという思いです」と言われます。きっと、その心を支えていたのは、この信仰の歌と同じ響きであったと思えます。「たとい死の影の谷を歩むとも、災いをおそれません。あなたが共にいるからです。」事実、神は共にいるのです。その確かさの中で、坂田先生は生きられ、そして今平安を得て、神のもとに行かれたのです。

「あなたのむちと、あなたのつえはわたしを慰めます」。つえとむちの音、神と共にいることが分かる音、その音色が響いている場所があります。その場所は教会です。

坂田先生は、残された文章の終わりに、それを読む人々にこのように語りかけています。

「私達が為すべき第一のことは、神様から離れず神様中心に生きることだと思えます。神様を礼拝することこそ第一に為すべきことです。私が今日までどうにか信仰を保って、神様から離れないでこられたのは、教会に繋がっていたからだと思えます。聖日礼拝に努めて出席して御言葉を聴き続けたからです。」

それによって私の信仰は聖書から離れず、自分勝手なものにならずにこられました。また礼拝に出席することによって日常の雑事から開放され、神の前に一人の人間として引き戻され、私の神、私の救い主を明確に示されました。そして神のご臨在とご栄光を讚美し心の平安が得られたのです」。

これが坂田先生の人生を通して、私どもに語られていたことであります。神を讚美しよう。主を礼拝しよう。教会に来れば分かる。主が生きておられることがあなたにも分かる。共に居てくださることが分かる。「あなたのむちと、あなたのつえはわたしを慰めます」という言葉が分かる。

坂田先生が地上からおられなくなっても、主はあなたの方と共におられる。この主があなたたちを慰めてくれる。あなたたちを支えてくださる。そしてこの主が、今悲しみの中にある私どもとも共にいて下さり、慰めてくださる。坂田先生はきっと今こう語りたいのだと思います。この主の御前でまた会おう。この主のみ前でまた会う日まで、主があなたと共にいまして、あなたの行く道を守られますようにと。

坂田先生は、この主イエス・キリストに全てを委ねられました。残された者達に、キリストへの信仰を残し、その主に全てを委ねられました。私どもも坂田先生のすべてをこの主に委ねましょう。人間は、生まれたときと同じく、死ぬときも地上の何も持っていくことは出来ませんと言われます。しかし、坂田先生は信仰を持っていかれました。キリストの十字架の愛、裏切ることのないこの愛によって、罪の赦しを与えられ、確信し、その生涯を主に委ねて安心して旅立ってゆかれました。このキリスト者の生き方を、私共は心に刻み、主に栄光を帰し、お別れをしたいと思うのであります。

祈りを致します。

主イエス・キリストの父なる御神。坂田創先生を、あなたが与えて下さり、心から感謝いたします。「主は与え、主はとりたもう。主の御名は褒めたたえられるべきかな」。今、永遠のいのちという素晴らしい希望を約束して下さったあなたに、坂田先生をお委ねします。どうぞとらえて下さい。つい先日まで生きておられた愛する先生の顔をもはや見ることができないことは、本当につらいことです。どうか、私どものこの心を支えて下さい。特に残された家族・兄弟に、今こそ近づいてきてください。その心に触れて下さい。慰めて下さいますように。坂田先生と共におられるあなたが、今ここにおられることを、深く味あわせて下さい。すべてを委ねて、イエス・キリストの御名によって祈り捧げます。アーメン

人になれ
奉仕せよ
その土台は
イエス・キリスト也
坂田 祐

坂田 創（さかた はじめ）先生の略歴

- ・1926年（大正15年）9月22日
横浜市南太田町字庚耕地1350番地（現・南区）に父・佐々木 金吾、母・せつの長男として出生
 - ・1947年（昭和22年）
坂田 祐、トシの養子となる
- 生涯独身 2014年5月8日 召天 享年87歳

〔信仰歴〕

- ・1944年（昭和19年）4月16日
バプテスマ受領 霞ヶ丘教会会員となる

〔学歴〕

- ・1944年（昭和19年）3月6日
関東学院中学部卒業
- ・1947年（昭和22年）3月15日
旧制横浜工業専門学校卒業

〔職歴〕

- ・1947年4月1日～1948年8月31日
日本金属工業株式会社 研究部勤務
- ・1948年9月1日～1992年3月31日（定年退職）
関東学院中学校・高等学校勤務
- ・1992年4月1日～1996年3月31日
同校・非常勤講師として勤務

（以上、告別式次第に掲載された坂田創先生の御略歴を転載させていただいた。この他、関東学院の法人評議員および中学校副校長も歴任され、2003年以降、召天日までは、関東学院大学キリスト教と文化研究所客員研究員も務められた。）

「坂田 創先生の思い出」

元関東学院中学校高等学校 教諭 佐藤 和久



坂田 創先生が召天されてご遺骨は、しばしご遺族のもとで過ごされ、やがてご納骨の日が参りました。本納骨は佐々木 敏郎先生が司式をなさり、分骨の司式を囚らずも私が仰せつかりました。午前中は強い雨でしたが、幸い午後は雨も上がり、ゆっくりした気持ちで納骨を済ませました。式のために「式次第」を作って墓前にお集まりのご遺族にお渡ししました。一般的に市販されている葬儀関係の式次第は、表紙に十字架や開かれた聖書、または百合の花がプリントされたものを使うのですが、私はある意図があって手製の粗末な物でしたが、表紙と中の頁に、エーデルワイスの花を載せたものを用意しました。

納骨された坂田 創先生の霊は、いま神様の御許にあること、それは主イエス・キリストの十字架とご復活によること等お話させていただき、式もやがて終わるところで、エーデルワイスの説明をさせていただきました。

それは、生前、創先生は教職員の交誼会や、クリスマス会または生徒のリラックスした会などで「先生何かして下さい、お願いします」と言われると、きっとエーデルワイスの歌を唄われたからです。実際には原語でお歌いになったのですが、文部省訳のものをご紹介します。

「エーデルワイス」

エーデルワイス エーデルワイス
かわいい花よ
白いつゆに ぬれて咲く花
高く青く光る あの空より
エーデルワイス エーデルワイス
あかるく 匂え

エーデルワイス エーデルワイス
ほほえむ花よ

悲しむ心 なくさめる花
はるかなアルプスの峰の 雪のように
エーデルワイス エーデルワイス
かがやけ永久に

ここに、家内が描きました「淡彩画」を載せさせて頂き、創先生を偲ばせて頂きます。

因みにエーデルワイスの花ことばは「尊い思い出」「大切な思い出」ですと付け加えさせて頂きました。私にとってエーデルワイスを唄われる創先生のお姿は、忘れられない「大切な思い出」となっています。

神学校を卒業したばかりの何もわからない私を、先生は様々お導き下さいました。当時聖書科が中心になって実行したことは、中学校の毎週木曜日放課後、クラスごとのYMCA 聖書研究です。これは部活動を全部やめて、この日は宗教活動の日とするほど重要なプログラムでした。早速その週から計画実行が必要です。創先生は学年ごと、クラスごとの先生の配置、聖書研究の内容すべてに細かくご指導下さいました。

ところがそれどころではありません。山本 太郎副校長に呼ばれて「佐藤君、自然教室だ、修養会のような堅苦しいものではない、自然教室だ。御殿場東山荘、4泊5日。今年はずまず中一。」学院で初めての行事です。新任教師として何も考えずくものはありません。神学校時代併設中高のキャンプをしていましたから、それを大きく膨らませて、創先生に見てもらいました。こうして実施されたのが思い出深い「自然教室」です。

そして、やがては中一から高三までとなったその土台は、坂田 創先生のお力なくしては考えられない大行事となり、毎年の高校卒業式に生徒代表が壇上で語る学院生活の思い出に自然教室のことが出るたびに、私の胸に先生への感謝が浮かび上がるのでした。

先生は理科の教師でしたが、その授業は大変分かりやすく丁寧に進めて居られました。ある日偶然理科教室横の廊下を通りかかると、中から坂田先生の声が聞こえてきました。思わず立ち止まって耳をそばだたせると、何とも丁寧な言葉づかいで優しく説明しておられます。紳士淑女に話しているかと思いました。黒板の文字もきちっとして読みやすく、これでは生徒は理科が大好きになれると、思わず拍手をしたくなるのをやっとなり抑えて通り過ぎたことがありました。

先生は長い間、橄欖会の会長をなさいました。ある時、先生から橄欖会のチャプレンを仰せつかり、先生の任期の間務めさせていただきました。今となって、先生の意図された「チャプレン制度」の必要性をもっと深く伺うべきではなかったかと思うこの頃です。

創先生とはプライベートにもいろいろなことをご一緒させていただきました。スキー、テニス、ゴルフ、先生の愛車となるBMWのお世話等々。

又、卒業生が経営する「スポーツクラブ・アービル」で、一緒にプールで泳いだり、サウナで話し合ったりできましたのは、学院で私だけではないでしょうか。文字通り裸のお付き合いをさせて頂きました。

学校内でゴルフをする人はほんの四人、全部が坂田先生の同期の先生たちでした。後から一年下の私達、その他が加わったのですが、「隠れゴルファー」の時代のことです。

軽井沢に一泊し大浅間カントリークラブをご紹介して一緒にプレイしたり、先生がお持ちの鎌倉カントリー、葉山カントリーなどでプレイさせて頂きました。私の方が後からゴルフを始めましたので、追い掛けるのが大変でしたが、よく誘って下さいました。

冬にはスキーです。スキー場の長野県にある花房の民宿に泊まって、農家でしたから部屋の中に牛が飼われているという何とも変わった民宿に泊まったり、関東スポーツクラブに移って、紅白歌合戦を聞いたり、楽しいスキーでしたが、大変なことも有りました。隣のスキー場に学校のスキー教室が来ているから訪問してこようと、何人かで行ったのは良いのですが山道で馬が曳く橇の跡が深く掘れていて、どこにもスキーを持っていく場所がない始末です。自分が行きたい方向に曲がるのが出来ないどころかボーゲンで止まる事さえできない荒れ放題の道。創先生を始め行った人たちは体じゅう青痣・赤痣大変でした。もっと詳しく状況説明をしたいのですが、創先生の思い出なのか、はたまた何なのか解らなくなってしまいます。要するにあのようなところにスキーを履いて行くものではなかったということでした。よくぞ骨折・捻挫をしなかったと誉めてあげて下さい。創先生の運動神経抜群の賜物でした。



宗教委員会等でしばしば我が家にお出で下さり、その折、鉢植えて下さったアゼリアが春には今でも美しく庭を飾ってくれています。

先生はクリスチャン・コワイアの会長をなさったこともあり、一緒に練習をしたり舞台上に立ったり福音丸という瀬戸内海伝道の船に乗って鳥々を演奏旅行に回る等、強く思い出にきざまれています。

これは先生からお聞きした話ですが、お母上とご友人を伊豆へのドライブにお連れした帰り、宇佐美の干物屋に立ち寄り、店のおばさんから運転手に間違えられてお土産をもらったとか。母上に最後まで尽くされた親孝行に頭が下がる思いです。滑稽な土産話まで聞かせてもらいました。

ドライブといえば、数人の先生方とそれぞれの愛車を運転して、これも伊豆一周に出かけました。正月の学校の休みを利用してのことでした。美しい富士に思わず車を止めてしばし運転疲れの体を休めたり、爪木崎のきれいな水仙を見たり、楽しいドライブでした。

坂田 創先生は信仰の篤い方でした。霞ヶ丘教会には子供のころから熱心に通われ、成人なさってからは執事の重責を長く務められました。先生が任期をはたされると、関東学院で同期の水野 哲太郎先生が次の執事になり、水野執事が任期を終えると、今度は坂田執事と、総会で選挙によって決まるのですが、うまい具合にお二人が交代々々になるのです。

先生は教会学校でも教師として熱心にご奉仕なさいました。夏季キャンプにご一緒させて頂いたのも貴重な思い出です。

信徒会（関東部会に有った）会長もなさり、部会の各教会に湯飲み茶碗を沢山プレゼントしたり、部会女性会と協力して、部会の引退牧師方を鎌倉の有名店でもてなす等、ご活躍は数え切れません。

しかし、

昨年12月16日、坂田 祐院長の墓前礼拝に、創先生は体調優れず、ご自身これが最後と分かっていたのでしたが、礼拝後のご挨拶は、いつものように、にこやかに「また来年お会い致しましょう」と。

そして、創先生のお元気な間はご出席の皆様にご招きあがっていただくこと、四十年来茶屋に届けさせて頂いた家内謹製のクッキーへのお礼か、我が家に美しい見事なシクラメンの鉢をお届け下さいました。

入院して居られる衣笠病院にお見舞いに参り、聖書を読み、お祈りをしたのが最後になりました。

有終の美、飛ぶ鳥後を濁さずと申します。それは、これだけではありません。

先生はご葬儀の準備すべて、祭壇まで細かく図入りで記したものを残されて逝かれました。棺の上には主の十字架の血による救いの象徴か、横浜クリスチャン・コワイアでよく歌った「シャロンのばらイエス君」を意味してか、真紅の薔薇が置かれて、十字架の救いに与った者らしく、清楚にそして篤い信仰を静かにあらわしてのご葬儀でした。

先生に心残りがおありとすれば、坂田 祐院長の克明な日記を解読するそれは大変なお仕事を、あと少し残しての最期であったことでしょう。

いまは、ご家族から頂いた、「創スマイル」の御写真と、先生が大切にお部屋に飾って居られた壁掛け。そこには『For God so loved the world that He gave His only begotten Son』「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛してくださいました」（ヨハネの福音書3章16節）のみ言葉が刻まれて、我が家に飾られています。

坂田 創先生のご生涯が静かな中にも激しく燃える、主イエス・キリストによる信仰と、「人になれ 奉仕せよ」の関東学院校訓に生き抜いた先生のお姿を鮮明に表していることを覚え、坂田 創先生の地上でのお働きとお交わりに感謝し、主の御許での永遠の生命を心から讃えます。

神谷量平という人（1914～2014）

—その晩年の追想—

青山学院大学名誉教授、故神谷量平氏友人 関田寛雄



▲神谷量平氏
2003年2月26日、自宅

はじめに

神谷量平氏は生前既にA4版9頁に及ぶ「略年譜（未完）」（1996年まで）をまとめておられた。筆者の神谷氏との関わりは、1996年日本基督教団川崎戸手教会の日曜礼拝に出席され始められて以来のものである。従って神谷氏の晩年における密度の高い交わりが本文の内容となる事を予めお断わりしておく。

1、山手教会より戸手教会へ

神谷氏は1928年関東学院中学部に入学された。関東学院は米国北部バプテスト教会の宣教師によって設立（1884）されたミッション・スクールであり、同氏はここで初めてキリスト教に接触されたのであった。同校の高等商業部を卒業されたのが1936年であり、正に日中戦争最中の年である。軍隊生活や発病による除隊以降の執筆活動などについては略年譜に詳しい。その間関東学院の学生時代に受けたキリスト教の教育とそれを媒介した教師たちとの関係は底流として神谷氏の思想を熟成していたようである。

神谷氏がキリスト教の洗礼を受けられたのは日本キリスト教団東京山手教会牧師平山照次氏により、1995年3月、81歳の時であった。神谷氏と平山牧師との出会いについては推測の域を出ないのであるが、後述するように社会的キリスト教運動（SCMと略す）に関心を持つべく推された、かつての恩師の紹介があったの事であろう。というのは平山牧師は日本宗教者平和協議会（略して宗平協）の議長を長く務め、プロテスタント、カトリック、仏教その他の宗教者たちの反戦平和の運動の中心として戦後活躍された方であったからである。しかし平山牧師の引退後、後任牧師の対社会的姿勢のあいまいさに飽き足らず、川崎戸手教会に移って来られた。それは川崎で教会作りをしながら、特に在日コリアンの人権問題に取り組んでいた筆者のことを平山牧師が紹介されたからであった。そして正式に戸手教会員として入会されたのは、2001年1月であったが、既にその数年前から戸手教会牧師であった筆者と神谷氏との交わりは始まっており、神谷氏の居所から戸手教会まではバスで20分位の距離であり、月

に1回位の割合で、武蔵小杉の「ピアノ」なる喫茶店での語り合いが続けられる事になったのである。

2、関東学院の恩師たち

「ピアノ」は神谷氏の居所から歩いて5、6分の所にあり（最近閉店された）、語らいはいつも午後1時間半から2時間位、話題は実に様々のトピックに移り行く豊かに楽しい交わりの時であった。その語らいを重ねる毎に筆者は関東学院の、彼の恩師たちの宗教的、思想的影響が深くある事に気付かされたし、更にその師たちについて筆者自身、様々な形での出会いを経験していたので、話はますます弾んだ事は言うまでもない。

(1) 先ず岩手県遠野の出身で70年余に及ぶ英文学研究と英語教育を関東学院大学及びその定年退職後は愛知学院で続けられ、103歳で他界された多田貞三氏の影響を挙げなければならない。多田氏の事については同氏の遺された文集、『多田貞三文集』（1977年、丸善・名古屋支店、再版1983年）が参考になる。500頁余に及ぶ本書の出版委員会の中に神谷量平氏の名が見られるし、その人柄については「先生のうちにある鬱勃たる反骨の精神や、秘められた鋭峰を見過ごしてはならないという点であります。もし今の学校教育の現状に思い及べば、この文集の至る所に、痛烈な批判が蔵されていることを知るでしょう」と本書の編集者は想起している。一方筆者は多田氏に直接面識がある。それは1948年横浜YMCAに筆者が就職した時、同校英語学校の校長（関東学院教授と兼務しつつ）として出会い、特にその毎朝の職員礼拝における多田氏の敬虔なる参加の姿勢を明確に記憶している。

神谷氏との語りの中ですら同氏が多田貞三氏に何度も言及したエピソードがある。それは、「満州帝国」建設宣言（1932）をめぐって、ある日英語のクラスの途中で生徒に窓を閉めさせた密室の中で烈しく政府の侵略政策を批判し、「このような道を進めば日本は必ず滅びる」と切々と訴え続けたというのである。この当時の政治状況を知る者にとってこの発言がどんなに危険な質のものであるかは余りにも明らかであり、それを聞いた学生たち（神谷氏もそのひとり）にどんなに強烈な印象を与えたかは想像に余りあろう。神谷氏の思想、信仰を基礎付けたもののひとつにこの多田氏の発言と戦後の活動の影響があったことは明らかであった。

戦後神谷氏がキリスト教社会主義に目覚め、機関紙『山麓通信』（1983年刊開始、100号まで継続）によって自らの主張を展開し続けた動機は恩師、多田貞三氏の信仰と行動に触発されたものがあるに違いない。事実、1984年、多田氏の推薦により、日本SCMに正式に入会を果たしている。そこでの和田洋一氏（元同志社大学教授）、中原賢次氏（元YMCA主事、『YMCA学生キリスト教運動史』の著者）、西川治郎氏（関西SCMの担い手）また武邦保氏（同志社女子大学教授）たちとの出会いは、神谷氏を大いに勇気づけるものであったであろう。

神谷氏が恩師たちを通して深く影響されたSCMとはそもそもどのようなものであるかをここで言及しておきたい。

第一次世界大戦後の不況の中でアメリカの神学界の中に社会的キリスト教運動なるものが発生した。マルクスの痛烈な宗教批判“宗教は民衆にとって阿片である”に対応し、しからは阿片でないキリスト教、即ちイエスの教えた「神の国」の福音の現世界における実現のために、資本主義に反対しつつ、他方、マルクスの問題提起を受け止めつつ、イエスの愛の教説によって社会変革をもたらそうという主張であり、運動であった。アメリカのパプテスト神学者のラウシェンブッシュによる『社会的福音の神学』（1917）が若者、学生たちに強い影響を及ぼし、本来は「学生キリスト教運動」（Student Christian Movement）であったものが、「社会的キリスト教運動」（Social Christian Movement）と、内容の深化を見せ、広く日本のキリスト教界にも影響を与え始めた。因みに上記の書の邦訳はパプテスト教会の友井 楨牧師（関東学院神学部出身者）によって行われ、当然、多田貞三氏も注目していたであろうし、神谷氏の若き魂を直撃したのである。当時毎年夏に御殿場東山荘で行われていたキリスト教学生夏期学校は治安維持法違反の疑いで御殿場警察の介入を受け解散を余儀なくされ、終戦までその開催は禁じられていた。

多田貞三氏は1988年白寿を迎え、神谷氏は静子夫人と共にその祝宴の旅で名古屋に向かい、その後伊勢鳥羽方面に遊んだと略歴に記されている。多田氏は前述したが、103歳で召天された。

(2) 今一人神谷氏の恩師として挙ぐべきは相川高秋氏の事である。相川氏は1905年、東京市ヶ谷に牧師である父渡部元の次男として生まれた。父は四谷パプテスト教会の牧師であり、長男一高と共に青山学院中等部を経て英語師範科に進んだ。二人ともパプテストの信仰に育まれて成人し、兄は米国、英国、ドイツ留学を果たした後、関東学院高等部社会事業科の教授に就任した。弟は英語師範科を銀時計を拝領する程の優秀な成績を残して九州帝国大学法文学部英文科に進み、卒業後は関東学院高等商業部講師に就任、結婚により相

川姓を名乗り更に翌年同校教授になっている（1930）。

神谷氏が相川教授に接しそのキリスト者としての見識と学識に触れつつ、1936年に同校を卒業するまでに与えられた相川氏の影響も少なからずあった事は明らかである。第二次大戦中の軍部の圧迫の下にありながら関東学院を守り抜いた相川氏は横浜大空襲（1945・5・29）の時、爆弾の嵐の中を辛うじて生き抜いたものの、惨憺たる焼け跡と焼死体の山を見、その間を縫いつつ4分の3を焼失した学院に通った時、深く期する事があった。それは不戦平和への固い決意であった。戦後相川氏は1953～54年にかけて米国パプテスト系のクローザー神学大学院に留学した。相川氏の言葉によると「クローザーは、そのラディカリズムで知られていた。……私はそこでラウシェンブッシュを学び、ニーバーを学び、トレルチを学んだのである。……ほとんど入れ違いに、マルチン・ルーサー・キングが学んでいたのである」。またかつての同僚の高谷道男氏によれば、「相川先生は新任間もなく高商部のゼミナール活動に深い感化を与えたらしく、ことに一面マルキシズムの唯物弁証法を理解されると共に、他面、西田哲学に深く傾倒して一種の『相川哲学イズム』を学内に発散せしめた」と言われる。

このような恩師の際立った指導に神谷氏の知性と魂が燃え上がるのは余りにも当然というべきであろう。事実略年譜にも明記されているように、1971年から83年まで12年余に渡って相川氏の読書会に神谷氏は参加しているのである。70年安保の炎のさめやらぬ時、神谷氏は恩師の下に駆け込まざるを得なかったであろう。のみならず相川氏の『死と虚構—関東学院在職50年を記念して—』（真珠社刊、1978）の著作発刊に具体的に協力している。相川氏は1995年90歳で世を去られたが、恩師を二人まで送った神谷氏の寂寥の思いは察するに余りあるものである。その反戦平和の祈りとマルクスを始めラウシェンブッシュをめぐる学識の遺産を身近に受けた神谷氏自身の人生と世界への姿勢の源泉をここに見る思いである。これまた『山麓通信』という、100号に至るまでのSCM論展開のエネルギーを支えるものであったに違いない。尚、『山麓通信』全巻は感謝と共に関東学院学院史資料室に受納されている。



▲神谷量平氏
2002年12月17日、自宅

3、喫茶店「ピアン」における語らいの中で

前述の如く筆者にとって最も濃く神谷氏の内面に接しつつ、且つ筆者自身の思想・信仰の内容をありのま



▲『京浜文学』神谷量平追悼号より

まに吐露し得たのはこの場であった。語られる話題は正に無数・無限であった。しかし中国戦線における神谷氏の短い兵役生活（1938年入隊、翌年発病のため召集解除）については殆んど触れる事はなかった。それについては歌集『自分史史料』（1990）及び『続自分史史料』（1994）によって推測するしかないが、日本兵の略奪、家屋焼棄、捕虜斬殺、「慰安婦」についての片々たる描写など、生き証人でなければ書けない悲惨を、淡々と詠んでおられるのが心に沁み入る所である。因みに後者については第三回横浜文学賞が与えられている。

この語らひはやはり昭和という時代を私も共に生きたものとして15年戦争をめぐる批判的コメントが行き交い、戦争責任、天皇制、自衛隊、60年及び70年安保、社会党の没落、共産党の評価と批判、新宗教教団の問題、更には文学の世界に移ってはもはやここには書き得ない程、多様な作者、作品が言及され、それぞれのコメントを楽しく分かち合ったものである。ただ残念に思ったのは神谷氏の劇作をめぐる作品に余り言及されず、それには私の側のその方面についての無知の故であったかも知れない。今回神谷氏の略年譜に詳細に作品が列挙されているのを見て、御生前にもっともっと神谷氏の作品にかける思いについて問うておけばよかったと、今になって後悔している。

SCMについての神谷氏の情熱は変わらず、関西SCMの第一人者西川治郎氏や具体的な運動の担い手として同志社女子大の武邦保氏の名がよく語られた。そしてSCMのキリスト教神学における限界を指摘する、K・バルトについては深い関心を示し、特に関東SCMの集いにバルト神学者の小川圭治氏を招いての研究会に熱意を示した神谷氏であった。その小川氏の批判とされるのはSCMにおける人間実存の危機的状況に対して楽観的に過ぎるという点である。19世紀的進歩主義的歴史観の克服が充分でない点であり、聖書の証言する終末論との折衝が不充分であるという点でもある。しかし21世紀の今日、世界的な貧困と差別のグロ

ーバルな広がりに対してキリストの教会が個人的観念的救済信仰に留まることなく、イエスの存在に類比する解放の福音が積極的に宣べ伝えられるべきであるならば、SCMの役割は依然としてキリスト教宣教において無視されてはならない。この点が正に神谷氏の主張であり、筆者の共感してやまない所でもある。

この語らひの中で筆者にとって深く印象に残っている点は、神谷氏が直接学生時代に接し英会話を習ったコベル宣教師のことである。神谷氏にとってコベル宣教師の殉教の物語、これは相川氏から戦後聞かされた事件として、神谷氏が筆者に無量の感慨をこめて語ってくれた事である。これについては正確を期するために関東学院大学名誉教授高野進氏による「相川高秋」の文章を参考にする。この出来事を劇作化して見たいとは折々神谷氏の語っていた事である。

J・H・コベル宣教師は1896年生まれで1919年に宣教師として来日。10年にわたって相川教授と共に関東学院で教えたが、1929年平和主義の立場の故に日本を追われ、フィリピンに移動した。神谷氏とは短期であったが師弟の間柄であった筈である。戦時色が濃くなった頃、関東学院にも軍事教練が導入された。その日コベル氏は喪服を着用して学院に現われ、配属将校に「どうです、この服、私に似合いますか」と、皮肉たっぷり迫ったという。1943年日本軍のフィリピン侵攻の中で日本兵に囲まれたコベル氏は日本語で非戦闘員であり日米いずれにも加担することのない宣教師である旨、説明したにもかかわらず、「命令だから」という日本兵の主張のもと夫人のシャルマさんを始め10人の他の宣教師と共に斬首されて果てたのである。

この悲報を聞いたコベル氏の娘マーガレットは教師の職を辞して日本兵俘虜収容所の勤務を志願し両親を殺した敵国の軍人に仕える道を選んだのである。その妹のアリスはバプテスト・ミッションの日本本部に多額の金を送って来てその手紙には「両親の殉教の死を知りました……。父が生きていたら愛し、力を尽くしたであろう日本人のために……。私の俸給の一年分に相当する金額を同封します。これを日本の若い人々のお役に立てていただきたい」とあった。相川氏はこの話を聞いて「本当に日本は負けたと思いました」と述懐したそうである。神谷氏が「関東学院物語」を戯曲化したいと幾度も語っていたのはこの事件であった。相川氏から聞いたこの話は神谷氏の不戦平和の思想の礎石の一つとなったに違いない。

関東学院広報課の瀬沼達也氏による「建学の精神を生きる一劇作家・短歌作家 神谷量平さんインタビュー」（『生き続ける88年の歴史』—これは神谷氏88歳の時になされたものである）によれば、神谷氏はコベル宣教師殉教の事件について短歌に詠んでいる。

・抜き放った 太刀の光に 眼を伏せた
平和主義者の コベル先生

・コベル先生、沢野師、木村良一君
フィリピンで 見守り給へ

(『続自分史史料』より)

「映画俳優のようにスタイルのいい人で、僕らの憧れでした」とは中学部生徒の時に英会話を習ったコベル宣教師についての神谷氏のコメントである。

更に「ぶちこんだ 牢屋の人を 出していけば ヒロシマ・ナガサキは なかった筈だ」「大空を 黒板にして 『戦争反対』と誰にも消せない チョークで書きたい」とは、「核兵器をなくし軍縮をすすめる中原区民の会」代表としての神谷氏の歌である。瀬沼氏によるインタビューでコベル氏についての話の中で報せられている。

2003年3月に発行されたこのインタビュー記事は実に貴重なもので神谷氏の広い人脈関係を示す短歌も紹介されている。

・あの男 どんな恋愛 するかなーと

野間宏 私(ひと)のこと 言うたそうだが

・「わが帝国も こまったものだ」とよく言った

アーネスト・サトウの息子 武田久吉

・羽織袴 白足袋が 普段着 なのだろうか

迎えてくれた 柳田国男

そして母校関東学院へのアドヴァイスを求められて神谷氏は言う、



▲『京浜文学』神谷量平追悼号より

「草創期のように、『一人ひとりを大切に教育』をしてほしいと願っています。また教職員が情熱をもって学生や生徒に範を示してもらいたいと思います。キリスト教は一種のパワーですから」と結んでいる。それは神谷氏自身が母校から受けた

「パワー」であったに違いない。

喫茶店「ピアノ」が閉店となり、神谷氏と私は場所を精養軒付属の喫茶室で語らいを続けた。そしてその2回目の約束の前日、神谷氏は倒れた。限りなく意義深く懐かしい私たちの語らいはここに途絶えたのである。

最後に神谷氏の私への手紙の一部を紹介したい。これは2011年10月2日の書簡である。

「拜復 主の御名を崇めます。私の放浪時代の通信(筆者注『山麓通信』のこと)を御評価下さいまして有難うございました。過去の評言の中で最高の御高評で感激しました。SCMの本拠は関西で同志社のOBた

ちによって維持していましたが現在は壊滅状態で残念です。何とか復活させなければならないという義務感を感じていますが、心身は益々衰えています。

今月末に私の『信徒説教』(筆者注・川崎戸手教会では第5日曜日は信徒が礼拝の中での説教をすることになっている。この日は神谷氏の番であったこと)があります。このSCMについての訴えが主となります。聖書はマタイの福音書20章13、14節ですが(筆者注「ぶどう園の労働者」の例え話の箇所)、ラスキンの『この後の者にも』はもう古いですがここからしか始まりません。そして私の一生はやはりここで終ることになるようです。私の健康状態はどこが悪いのではないのですがヨタヨタしています。バランスがひどく悪くなりました。いつ、どこでどういうことになるのか不安ですので、この説教を最後に外出はやめようと思います。従って『ピアノ』での御面会は11、12、13日の中に御指定下されれば幸甚です。(以下略)。神谷氏の最晩年の信仰理解、教会生活、そして私との交わりの意味を遺憾なく表わしている書簡であり、私は忝なくこれを保存している。

終わりに

まだまだ話せば数巻の本になる程の豊かな神谷氏との交わりではあるが、紙数の限りもありここで終りにしたいが、どうしても言及しておきたいことは、神谷氏の『京浜文学』に寄せる期待とそれを支える情熱のことである。特に彼の最後の遺言ともいべきものを同誌の第22号、23号の「巻頭言」に見出すのである。第22号の「巻頭言」ははっきりと「一元論者からの発言(百歳の遺言状)」と書かれてある。「現在の政府はもう次の戦争の準備をしています。……私は今次大戦、いや敗戦の発芽が大正12年の関東大震災から始まったことを、はっきり記憶しています。……有名な『大杉栄事件』に代表されるドサクサ紛れの官製の殺人事件は今日まで行政側が一度も謝罪して来なかった事実ですが、それが積み重なって敗戦となったことも、誰も書いて来なかった大切な空白であることを指摘しておきたいと思います。……しかし残念ながら天皇制政府を中心に考えるとすべてが納得出来ます。これを変えない限り第三次世界大戦を防ぐことは絶対に出来ません。どうして今の作家たちはこれを書かないのでしょうか。……これを描いては『文学』はないのです。……私はキリスト者という一元論者で不退転の心算ですが……。」

更に第23号の「巻頭言」では「百歳の創作をめざして」と題された力強い未来志向が展開される。しかも「次号の『巻頭言』に続く前編であります」という書き出しの中に、このひとはどういう存在なのだろうと驚きをもって思わざるを得ないではないか。この未

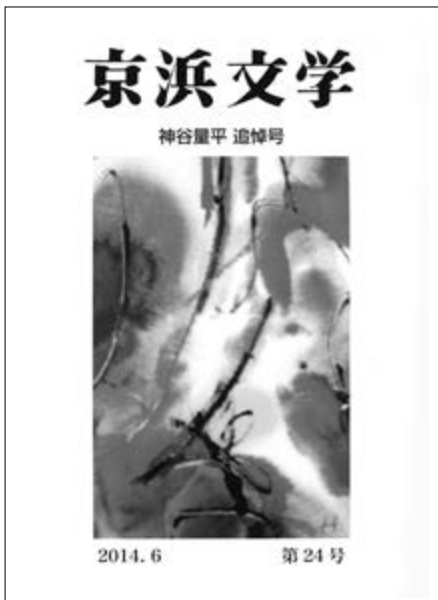
来志向性の中に私はイエスの言う「永遠の生命」の兆しを見るのである。

「……私はその百歳に向かって、もう一度『何故、アベノミクスなのだ』と問うてみたいと思います。怒りをもってしてです。現在国会で悪名高い『秘密保護法案』が審議されています。多分リアリズムの文学にとっては死活の別れ目を意味します。日本の有名な新聞は何故その本質に迫らないのですか。それがどういう危険性を持つとお考えなのでしょうか。それは怒りを越えられるでしょうか。それは国民の権利だったのではないのでしょうか。生きる力ではなかったのでしょうか。そのためにこそあるペンではありませんか……。神谷量平識」と結ばれている。嗚呼、この絶叫ともいべき「ペン」に生涯を賭けて百歳まで生きて来た人の問いかけに、私たちは何と答えたらいいのでしょうか。余人には決して吐けないこの叫びは神谷量平氏の全生涯の歩みの

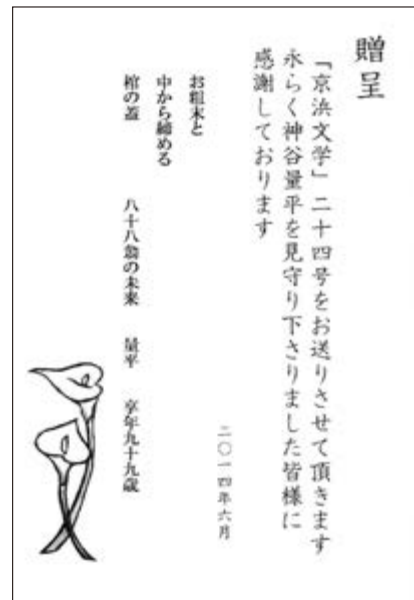
事実によって裏付けられているからこそ、何びとも否定できない、無視できない、聞かざるを得ない、アクションを起こさざるを得ない力の言葉ではなからうか。この『京浜文学』を場としての神谷氏の「ペン」の闘いは本誌の読者たちによってしっかりと継承されなくてはならないものではなからうか。

神谷氏と私とは14歳の差があるが、何のわだかまりもなく戦中、戦後の歴史と共に未来への展望について語り合ったパートナーを失って、今、私はまことに淋しい思いに包まれている。しかし信仰と文学と抵抗の遺産を私たちに残して逝って下さったことに対して心からの感謝を捧げたい。そして大切な柱を失った御遺族の皆様には神からの慰めと平安があるように祈るものである。神谷量平さん、ほんとうにありがとうございました。

(日本キリスト教団牧師・青山学院大学名誉教授)



▲『京浜文学』（神谷量平追悼号）第24号表紙



▲故神谷量平氏の奥様、静子様からご寄贈頂いた『京浜文学』神谷量平追悼号の送付状

神谷量平氏の文筆活動

故神谷量平氏ご親族の神谷洋平氏が、量平氏の文筆活動を、「終わりと始まり—文学者としての伯父・神谷量平—」と題する優れた文章の中で、簡潔にまとめていらっしゃるのので、ここに抜粋引用させていただきます。この場を借りて感謝申し上げます。【『京浜文学』神谷量平追悼号より】

①山歩きエッセイスト

月刊『山小屋』（朋文堂）、月刊『登山とハイキング』（大村書店）、『登山とスキー』（登山とスキー社）、月刊『岳人』（東京新聞社）などの連載。若き日の事始め。

②劇作家

『武蔵野の家』、『ヴォルガ収容所』、『薯盗人』、『子をとろ』、『暦程』、『京浜の虹』、『禁じられた人』、『塀と掘割の間』、『地底から』、『野中一族』、『ヒロシマのモヒカン族』、『女の戦記』、『村雨橋遺文』などの創作劇。読売演劇文化賞や横浜文学賞受賞の理由が戯曲にあるように、劇作がやはり中心に位置します。

③シナリオライター（映画）

『チャッカリ夫人とウッカリ夫人』、『続チャッカリ夫人とウッカリ夫人』（渡辺邦男監督作品）や『ともしび』（家城巳代治監督作品）、『楽しい学校劇』（岩堀喜久男監督作品）ほか教育映画のシナリオ。これらは劇作に付随した仕事でした。

④脚色家（演劇）

『夜の真珠』（大仏次郎）、『破戒』（島崎藤村）、『カンナニ』（湯浅克衛）、『聖のんだくれ物語』（ヨーゼフ・ロート）、『橋のない川』（住井すゑ）、『新幹線』（西河克己）などの脚色。同右。

⑤日本登山史研究者

『小暮理太郎論の試み』（岳人）、『知られざるウェストン』（岳人）、『山と横浜の話』（かながわ風土記）などの連載。山を愛した父親の影響は否定できませんが、若き日に横浜徒歩徒歩会なるグループを結成し、機関紙『道祖神』を発行していたところを見ると、もともと海よりは山志向だったようです。

⑥短歌作家（歌人）

『歌集 自分史々料』、『続 自分史々料』（キリスト教社会主義研究会出版部）など。若き日には俳人・加藤楸邨に師事し、後年歌人・佐々木妙二に教えを受けています。

⑦狂歌作家

『京浜文学』（京浜文学会）や『かながわ風土記』（丸井図書出版社）掲載の、筆名蚊宮間々ほかによる数々。（中略）

⑧キリスト教社会主義研究者

『山麓通信』（キリスト教社会主義研究会会報）第1号～第100号や、『ムーブメント』（SCM社会的キリスト教運動研究会機関紙）掲載の文章など。いずれも小冊子ですが、主宰者であった前者は、関東学院学院史資料室に全巻が総目次とともに保存されています。

⑨ノンフィクション作家その他

『麻布善福寺裏』、『関東大震災の思い出』、『関東学院事件』など半自伝的ノンフィクション。短編小説『伝記』。ラジオドラマ『ポク・ここにいるよ』。演劇と小説の融合を目論んだ『劇説』と自称したいくつもの作品。横浜勤労者演劇鑑賞協会代表、核兵器をなくし軍縮を進める中原区民の会代表としての執筆など。

神谷量平氏の遺されたもの

元学院史資料室 主幹 三 浦 啓 治



学院卒業生の最長老である神谷量平氏は2014年1月23日に99歳の生涯を終えて召天された。

氏は1928年に関東学院中学部に入學し、1936年に高等商業部を卒業された。既に、中学部時代に横浜徒歩歩会を創設し、機関紙『道陸神』を発行し、また、雑誌『山小屋』の

創刊号から142号まで寄稿を続けており、この頃から、ライフワークともいえる文筆と編集の活動を始めている。

氏の活動は多方面にわたり、特に劇作家、脚本家、歌人として多くの作品を残された。また、平和や核兵器廃絶の運動に長くかかわってこられた。

氏は若いときから演劇活動に参加され、劇団東京芸術座では、劇作、脚本を担当し、劇作では『地底から』、『京浜の虹』、『禁じられた人』等の作品、脚本では住井すゑの『橋のない川』をいずれも村山知義の演出で好評をばくした。また、代表作『歷程』は戦争感の違いから引き裂かれる兄弟の物語で、1952年以降複数の劇団により繰り返し上演されている。演劇雑誌『テアトロ』にも多くの作品が掲載されている。

映画関係では、家城巳代治監督の『ともしび』や渡辺邦雄監督の『チャッカリ夫人とウッカリ夫人』等の脚本がある。

歌人として、歌集『自分史々料』（1990年）、『続自分史々料』（1994年）を刊行している。

1994年には、これ等の功績により第3回横浜文学賞を受賞している。

ご尊父の影響で山を愛した氏は、若いときから登山を続け、山岳関係のエッセイも多く、戦後は『岳人』に『小暮理太郎論の試み』等を連載し、また、多くの論文が山岳関係図書に掲載されている。

1983年にキリスト教社会主義研究会を立ち上げ、機関紙『山麓通信』を創刊し、1993年2月号に100号を刊行し休刊とした。この会はキリスト教の福音によって社会問題の改革を目的とした研究会で、戦前のYMCAを中心に活発に行われていた「社会的キリスト教運動」（以下SCMと略）の流れに沿うものであった。この会には戦前に学院でSCMに関わった神学部卒業

生の野海政一や富田富士雄（元学院長）やYMCAでSCMを指導した中原賢次等も参加し、その後、関西のSCM研究会と合流した。関西からは戦前に学院神学部在籍し、SCMの活動をした西川治郎や武邦保同志社女子大学教授、和田洋一同志社教授等も参加し充実した研究会に発展した。

『山麓通信』には学院関係者の執筆も多く、多田貞三（元教授）、相川高秋（元学長）、村田百可（元中学部教師）等が寄稿している。

1993年から京浜文学会の主宰者として、『京浜文学』と「会報」を発行し、戦前学院でのSCMの活動を『関東学院事件の顛末』と題して連載中であった。

本年6月に発行された『京浜文学24号』は「神谷量平追悼号」特集号で21名の方々が氏の業績と人柄を称える文章を寄せられた。

氏は作品をとおして、平和を訴えてきたが、「核兵器をなくし軍縮を進める中原区民の会」の代表など実践活動もされてきた。

2013年8月28日のNHKの番組「おはよう日本」で「98歳時代を越えたメッセージ」として、氏の活動が放映された。作品『村雨橋』と『女の戦い』が相次いで昨年公演され、この作品には戦争の悲惨さが風化されている今、日中戦争に従軍し、戦争の不条理を体験した者として戦争を繰り返してはならないとの氏のメッセージが込められていると紹介された。

氏は日中戦争で従軍中胸膜炎にかかり召集解除で帰国、1945年5月29日の横浜大空襲の時に、東神奈川駅で爆弾により殺戮され多くの人の死を目のあたりにした。この体験を心に刻み、文筆活動をとおして戦争の不条理と平和を訴え続けた。

氏は学院関係者との交流を大切にされ、相川教授が主宰した卒業生の読書会に1971年から1983年に参加し、この間、相川教授在職五十年記念の『死と虚構』の出版に協力した。氏の業績の一つに出版社勤務の経験もあり、優れた編集者として多くの方々の出版の世話をされ、作品として世に出されたことが挙げられる。

氏の生涯は、文筆活動をはじめ全ての活動が平和を訴え続け、99歳で天に召されるまで現役として活動した素晴らしい学院の先輩であった。

生誕 100 年に寄せて

学長事務室員、元学院史資料室員 菊池 友子

神谷様、生誕100年となりました。ほんの数年前ではありましたが、神谷様と資料、手紙などのやり取りを通じてその生涯にわずかでも関わることができたことは、わたくしにとって幸いでした。ありがとうございました。

さて、わたくしが初めて神谷兄のことを知ったのは『関東学院学報』に掲載された記事によってでした。その後、幾度か記事を読みなおしますと、戦前の関東学院で学んだ方であり、関東学院史のいくつかのトピックを実際に体験され、卒業後も多田貞三先生をはじめとする当時の学院関係の方々と交流し、キリスト教社会主義（SCM）について学ばれ続け、大変な人物であるということが時間を追うごとにわかってきました。

神谷兄が主筆をされていた『山麓通信』や『京浜文学』において、神谷兄が関東学院で過ごされた時代、すなわち、中学部に入学された1928年から高等商業部を卒業された1936年までのことを神谷兄ご自身が執筆されています。執筆された内容は、当時の概観というよりも、個人的体験が主であり、それゆえに生々しく興味深いものがあります。また、数十年を経たとは思えないような記憶の鮮明さが印象に残ります。これはわたくしの勝手な想像ですが、関東学院での日々が神谷兄の生涯の通奏低音となっていたのではないのでしょうか。あるいは、神谷兄に問いを投げかけていたのではないのでしょうか。2013年11月に病に倒れられ、身体が自由とならない非常に困難な状況下であっても、「関東学院」、「クリスマス」という文字を残されました。わたくしはそれを拝見した時に、ますますその思いが強まりました。

2013年1月発行の『関東学院 学院史資料室ニュース・レター』16号に、神谷兄による「『山麓通信』と『SCM』の経緯」が掲載され、それに合わせて「『山麓通信』総目次」をわたくしがまとめ共に掲載となりました。2011年に神谷兄が『山麓通信』を学院史資料室に寄贈くださったことが、この2つの記事の掲載につながりました。『山麓通信』は1983年9月（当初の誌名は『キリスト教社会主義研究会会報』）に誕生し、1993年2月（第100号）まで発行され、前述のとおり、関東学院に関する内容も多く、学院史資料室としては、是非所蔵したいと願っておりました。幸いにも、神谷兄と手紙を交わす機会を得、その願いを叶えることができました。なお、「『山麓通信』総目次」につい

て、神谷兄が喜んでくださったことは、わたくしにとっても喜びでありました。

職場や自宅での手紙の往復は何度もありましたが、わたくしが神谷兄と実際にお会いしたのは、わずか3度でありました。1度目は2011年5月に神奈川近代文学館で開催された「チャッカー夫人とウッカー夫人」（神谷兄による脚本）の上映会においてでした。上映会では、神谷兄の挨拶があり、2011年3月の東日本大震災と1923年9月の関東大震災の話がされていたのが印象に残っています。2度目は2013年8月に川崎能楽堂においてです。神谷兄の原作による「女の戦記」の舞台でした。1度目も2度目もほんの少しばかり挨拶をただけでした。その後、2013年11月公演の神谷兄原作「村雨橋遺文」でお会いできると思っておりましたが（11月2日）、神谷兄のお姿は見えませんでした。それからひと月後の12月5日、神谷兄の奥様から手紙を頂戴しました。そこには神谷兄が病に倒れたことが記されていました。11月6日のことでした。10月17日に神谷兄からお手紙を頂戴していたので、まさか、と思いました。そして、2014年1月、神谷兄が召天したことの連絡がお嬢様からありました。3度目にお会いしたのは、神谷兄の前夜式においてでした。この世でのお別れです。神谷兄は、日本基督教団川崎戸手教会の教会員でしたが、前夜式の会場は、川崎戸手教会の近くにある日本基督教団川崎教会でした。これは、多くの参列者が見込まれたためです。この川崎教会は、わたくしが10代の頃から奏楽を務めている教会です。偶然とはいえ、何というご縁でしょうか。わたくしは、慣れ親しんだ教会で神谷兄と最後の再会を果たしました。

「追悼文」ということではありますが、神谷兄の生誕100年をおぼえ、「生誕100年に寄せて」というタイトルにいたしました。神谷兄の奥様をはじめ、ご家族皆様が平安でありますよう心よりお祈り申し上げます。

（2014年9月記）



建学の精神を生きる 劇作家・短歌作家 神谷量平さんインタビュー 生き続ける 88年の歴史



瀬沼 神谷さんは、29年に関東学院中学部に入学され、36年に高等商業部を卒業されていますが、その頃の思い出をお聞かせください。

神谷 情熱を持ってキリスト教教育をするんだという意気込みを持った先生方が多くいたことが印象的でした。しかしその後、満州事変やその他の

戦争が起こり、外圧でキリスト教教育ができなくなる時代でした。平和主義者の先生がいて引かれる面もありました。

瀬沼 神谷さんの歌集『続自分史史料』の中にJ・H・コベル先生のお名前が入った次の2つの短歌がありますが、先生の思い出を語ってください。

抜き放つた太刀の光に眼を伏せた平和主義者のコベル先生

コベル先生、沢野師、木村良一君フィリピンの空で見守り給へ

神谷 映画俳優のようにスタイルのいい人で、僕らの憧れでした。中学部生徒のときに英会話を教わりました。33年の夏、三春台のテンネーホールで関東学院と捜真女学院共催の「国際親善の夕べ」が開かれました。これは横浜市在住の外国人たちと友好親善の一夕を持つためのものでした。特高警察は事前にマークしていたらしく、当日からそのために関係者たちが市内各署に検挙されました。

その夕べで菊池寛作「入れ札」一幕が上演されました。そのとき、コベル先生は忠治役の生徒に日本刀を抜かないで欲しいと申し入れたのに、忠治は聞かないで抜いてしまい、先生は思わず眼をつぶり頭をかかえて退場したので、僕らは臆病者と言って笑いました。しかし後年フィリピンのイロイロで日本軍の兵隊たちによって先生と奥様は虐殺されました。何とその日本刀による斬首でした。コベル先生は従容とした最期だったそうです。

瀬沼 僕も79年にイロイロのワークキャンプに参加したときにフィリピンの友人からそのことを聞き愕然としたことを覚えています。それは日本人の救いのために来日した先生が、軍国主義社会の下、日本にいられ

なくなり、フィリピンで虐殺されたという悲劇でした。前述の歌集に戦争の傷跡が痛切に感じられる歌も詠まれています。神谷さんは、現在「核兵器をなくし軍縮をすすめる中原区民の会」代表を務められていますが、その理由をお聞かせください。

戦場はいつも夜だった戦死した戦友（とも）には朝が来なかったから

ぶちこんだ牢屋の人を出していればヒロシマ・ナガサキはなかった筈だ

大空を黒板にして「戦争反対」と誰にも消せないチョークで書きたい

神谷 異常体験はいつまでも心に残っていて、毎年8月になると戦争を思い出します。不思議なことですが、生死以前に必ず自分自身が分裂します。決して大義一途に死ぬるわけではありません。それは非常に情けない迷いで、一種の股裂きの刑です。民族か階級か、同一志向か個人真情か、モノかこころか。それらは今でも続いています。「中原区民の会」代表は、戦争を経験した者の義務だと思って務めています。

瀬沼 神谷さんは現在88歳の現役の劇作家でもいらっ

しゃいますが、そのキッカケを教えてください。

神谷 まだ中学生のときに相山高秋先生が演劇に関心がある神学・社会事業部の青年たちにハプトマンの『織匠』とゴールズワージーの『銀の箱』を上演させ、夜だったので中学生では唯一人それを見たのです。二つとも社会主義的戯曲でしたから、当時としては珍しいことでした。戦前から築地小劇場に係っていたこれも関東学院の卒業生、清水秀夫（芸名織田良一郎・故人）に頼まれて、47年に僕は新協劇団に入団し、劇作を始めました。翌年、読売新聞演劇文化賞佳作に入選、また京都の雑誌『劇作』の創作劇募集に『墓』（一幕）が佳作に入選しました。その頃、東宝演劇部のプロデューサー佐藤一郎、久保栄や民芸幹部の滝沢修・森雅之らの知遇を得ました。

瀬沼 僕は滝沢修さんの『焰の人・ゴッホ』と『どん底』の芝居を観て感激しました。森雅之さんについては黒澤明監督映画の『羅生門』や『悪い奴ほどよく眠る』の名演技を鮮明に覚えています。黒澤監督は「映画は脚本で決まる」と言っていますが、神谷さんは映画の脚本も執筆されたのですね。

神谷 52年に新東宝で『チャッカリ夫人とウッカリ夫

人』(正・続)、家城巳代治の『ともしび』等の脚本を手掛けました。55年頃からは教育映画に関心を持ち出して三木茂、堀田公一の知遇を受け、翌年には岩堀喜久男監督の『楽しい学校劇』の脚本を担当しました。瀬沼 神谷さんの短歌を読むと時代の著名人がたくさん登場されますが、すごいことですね。そのいくつかの歌を選ばせてもらいます。

「明日あるを信じてどうして神あるを信じないのか」
と賀川豊彦
アメリカへ今夜帰るといふ午後の講演は「ジャイアント・ストライド」新渡戸稲造
向きあってじっと私をみつめていた室生犀星はどう思ったのだろう
あの男どんな恋愛するかなーと野間宏私(ひと)のこと言うたそうだが
「わが帝国もこまったものだ」とよく言ったアーネスト・サトウの息子武田久吉
羽織袴白足袋が普段着なのだろうか迎えてくれた柳田国男

神谷 多くの著名人の知遇を得ましたが、もっと色々な人に会っておけばよかったと後悔しています。でも、関東学院でコベル先生、相川先生そして多田貞三先生それに長崎書店(現在の新教出版社)の長崎次郎先生というすばらしい恩師との出会いは、自分の人生にとって幸いなことでした。

瀬沼 長寿、生涯現役の秘訣を教えてください。

神谷 今の世の中をみているとどうしても「知っていることは書いておきたい」という使命感を持ってしまふんです。歴史は本当は続いているのにいつもブツブツと切れちゃうんです。ですからその離れている歴史を繋げることが必要で、それをするのが年長者の義務だと考えています。キリスト教の歴史が続いているのも使命感があるからでしょう。

瀬沼 神谷さんが関東学院を卒業されて約67年が経ちますが、学校へのアドバイスをお願いします。

神谷 組織が大きくなっても肝心なものがないとしょうがありません。関東学院の草創期のように「一人ひとりを大切にする教育」をしてほしいと願っています。また教職員が情熱をもって学生や生徒に範を示してもらいたいと思います。キリスト教は一種のパワーですから。

【インタビュー後記】

神谷さんは1995年に80歳で東京山手教会において受洗されました。88歳の現在も『十年日記』を執筆中です。2002年5月には(第四次)『京浜文学』(創刊号)を発売され、その中で最新戯曲『わすれな草の港または夢窮動』を発表されています。この祝祭劇に登場する有島雅之に恩師コベル先生のエピソードを語らせておられる。神谷さんの子どものような齢の僕が逆にエネルギーを頂いた。

[以下掲載文は「神谷量平さんインタビュー」の英語要約である]

A Living Man of History An Interview with Mr. Ryohei Kamiya

Mr. Ryohei Kamiya was born on September 14, 1914, in Tokyo. Mr. Kamiya graduated from Kanto Gakuin Chugaku-bu (High School) and its Kotoshogyo-bu (Senior High School) in 1936. He is still active now as playwright and tanka writer at the age of 88. His main writings are *Rainbow in the Keihin Area*, *Rekitei* (The Journey of History) and *A Bullet Train*. He has written several dramas including *New Taikoki* by Mr. Eiji Yoshikawa and *A River without a Bridge* by Ms. Sue Sumii. The 3rd Yokohama Prize for Literature was awarded to his writings in 1994.

He is also a bureau chief of SCM (Social Christian Movement) Tokyo Branch, and a representative of 'Society of Nakahara-Ward (in Kawasaki City) Citizens For the Abolition of Nuclear Weapons and for Disarmament.' *Sanroku Tsushin* (Christian Socialism Newsletter) (100 numbers) were issued by him as the chief editor, from 1983 to 1993.

About Professor James Howard Covell

Professor Covell had a good figure like a movie star. Being a student at Chugaku-bu, Mr. Kamiya was taught English Conversation by him. In 1933, an international goodwill evening was held under the auspices of Kanto Gakuin and Soshin Women's High School at Tenny Hall on the Miharudai campus. The meeting was to promote goodwill between foreigners living in Yokohama and students and faculty members at both schools. The main persons concerned were arrested by the special policemen, because Japanese people were forbidden to make contact with foreigners in those days.

That evening, a drama titled *Irefuda* by Mr. Kan Kikuchi was enacted by students. Before the performance, Professor Covell asked the student playing Kunisada Chuji not to draw a Japanese sword. But the student drew it, and then he closed his eyes with his head between his hands and left the hall. The students laughed at his cowardice. Later, he and his wife were killed with Japanese swords by the Japanese army. They heard that he was calm and composed at his death.

Advice to Faculty members

Mr. Kamiya desires that Kanto Gakuin should treasure education, cherish each and every one of students, and that faculty members should show great enthusiasm and set a good example for their children. In his school days, the faculty members of Kanto Gakuin certainly did so.

インタビューを通して「悲惨な戦争を二度と起してはいけない」という強い意志を痛感した。神谷さんの誠実なお人柄に敬愛の念を抱き、聡明な知性に脱帽した。狂歌も詠んでおられるが、その一つを紹介して筆を置きたい。

「演劇の最も短い形式が狂歌であるとわれは主張す」

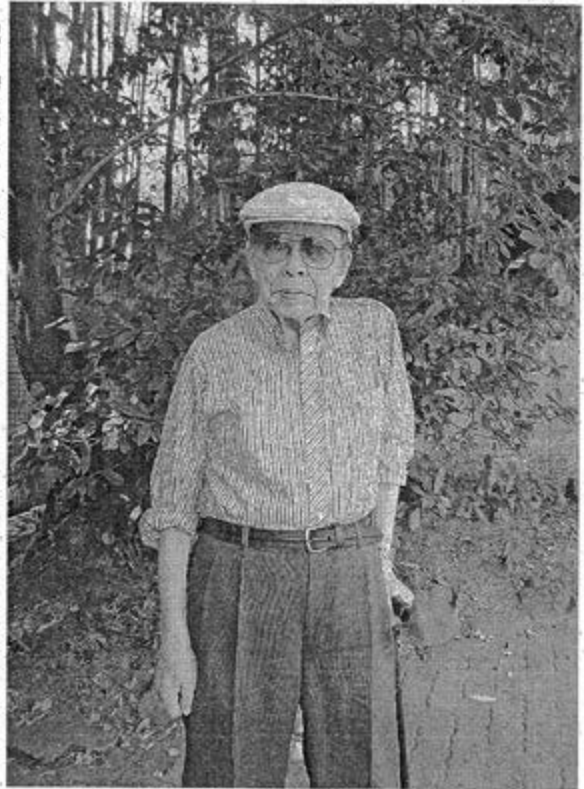
文・英語要約・写真◎瀬沼達也〔関東学院広報課(当時)〕

〔関東学院学報No.25〕(2003年3月発行)よりの転載

99歳、反権力の演劇

「戦車闘争」など題材の2作品上演

川崎の劇作家・神谷量平



「関東大震災で、多くの労働者の自覚的な運動が『消された』。そのことを残さなければ」と話す神谷量平
＝川崎市中原区

戯曲「京浜の虹」などで知られる川崎市中原区に住む99歳の劇作家・神谷量平の作品が、この夏から秋にかけて、相次いで上演される。日中戦争の前線に身を置き、横浜大空襲に遭い、戦後は地元で演劇活動に没入しながら歴史と向き合った神谷。劇中に描かれた市井の人の生活には、いつも戦争の影が付きまとう。

(斉藤 大起)

作品は「女の戦記」と「村雨橋遺文―飛鳥田一雄元横浜

市長に捧ぐ」の2本で、いずれも再演。演出は村雨橋達雄。「よく作家の生涯百年祭をやるけれど、私は生きていくからね」と神谷は照れる。「女の戦記」は、大空襲を受けた横浜のある病院を舞台に、自意識に目覚めていく女性の心情をたどる。神谷は「昔の男どもは不行儀をやつて、女が虐げられた」と苦々しく語る。女性たちが内に秘めた「復讐心」は、鬼婆伝説を題材にした長唄の「安達ヶ原」に着想を得たという。「村雨橋」は、1972年

に横浜市神奈川区の村雨橋で繰り広げられた「戦車闘争」が題材。ベトナム戦争のさなか、相模原市の在日米陸軍相模総合補給廠から戦場へ送り出されようとしていた戦車を、市民が阻止した運動だ。飛鳥田一雄に「捧ぐ」との副題に、村雨橋の重量制限を理由に戦車輸送を差し止めた当時の横浜市長への敬意を込めた。神谷は飛鳥田と同じ横浜・磯子の出身。「小学校の1つ下で、夜学では一緒だった」と述懐する。神谷にとって、ともに戦後の文芸活動に身を投じた仲間だった。

「自分の知っている、経験したことしか書けない」と神谷は謙遜したように言う。だが、この戦争の話になると「今の人は、どういうふうな戦争になるか分かっていないんだろう」と思うと語気を強める。自身が編集を手がける同人誌「京浜文学」の22号（今年6月発行）には「敗戦の発芽が大正十二年の関東大震災から始まったことを、はっきりと記憶しています」と記した。23年の震災時、混乱に乗じて朝鮮人や社会主義者が殺された歴史を、同時代人として心に刻んでいる。神谷は38年に召集され中国戦線に。翌年、マリアアにかかり偏国し、辛くも生き延びた。

両作品に共通するのが、人々の「自覚」だ。男性からの独立を自覚した女性、社会問題を自覚した市民。そして、自覚を無力化しようとする権力もまた存在した。「そういう歴史のパスバクタイプ（見取り図）を描かなければ」と、神谷はまだペンを握る意欲に駆られている。

◇ 「女の戦記」は11日に川崎能楽堂、18日に東京・中野の梅若能楽学院会館で、料金は前売り2500円。「村雨橋遺文」は11月2〜4日、東京・新宿の劇場「T.A.C.C.S.1 179」で、前売り3千円。両作品とも劇団「花企画」の公演。問い合わせは、同劇団 ☎046(251)3717。

▲2013年8月6日（火）発行「神奈川新聞」記事（神奈川新聞社提供）

学院史資料・情報提供のお願い

卒業生、修了生、元教職員の皆様には学院に関する資料・情報の提供をお願いいたします。現在の教職員の皆様には各学校、各部署等で発行されました刊行物を一部、学院史資料室にご寄贈くださいますようお願いいたします。また、各所で作成されたのち、既に保存期間を超えたか、不要になっている過去の書類、機器・備品、写真などにつきましても、情報を提供していただけますようご協力をお願いいたします。（関東学院 学院史資料室）

学院史資料展 2014 「建学の精神と校訓『人になれ 奉仕せよ』」の教育



▲写真①



▲写真②



▲大島での牡蠣養殖場ボランティア集合写真



▲タグラグビー大会集合写真

4年目となる震災ボランティア活動

2011年8月以来4年目となる震災ボランティア活動を、今年も宮城県南三陸町を中心に行ってきました。今年度は、新たに女川町の障がい者作業施設での交わりと、古川市の「吉野作造記念館」見学等も加わり、内容が一段と濃いものになりました。

活動の中心に据えている南三陸町津川は、今年の7月ころから目に見える形で復興に向けた工事が始まり、町内を多くのダンプカーが行きかっています。しかし、住宅地の高台への移転は険しい山を削りインフラを整備する大工事であり、それを何箇所でも進めなければならない、完成までにはさらに二年近い時間がかかるものと思われています。

そのような状況下、私たちにできることは継続して現地に寄り添い、そして思いを共感することでした。

私たちは、写真①のように仮設住宅の清掃活動、地域の草刈などの作業を行っていますが、この作業を通して地域の方たちのお話をお聞きし、触れ合うことを真の目的としています。これまでの積み重ねにより、地域の皆さんにとって関東学院の学生は、たとえメンバーが代わっても心を許してお話をいただける存在になっています。

お話を伺い、共感するためには現地のことを知らなければなりません。そこで、さまざまな方からいろいろな角度で震災の様子、現地の状況をお聞きしました。写真②は、その一環で元南三陸町教育長に、高台から町内をご案内していただいた様子です。かつては鉄道が走り、商店街を中心として家々が軒を連ね、病院やショッピングセンターのビルが立ち並んでいた町は、今は先生の話をお聞きしながら想像することしかできません。そして、その場所にはもうかつての町並みは戻らないのです。

私たちは、これからも継続して活動を続けたいと思っています。それが校訓「人になれ 奉仕せよ」の実践であると思うからです。

この活動は、皆さんのご協力抜きには行えません。引き続き、皆さんのご理解、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

震災被災地の復興支援として気仙沼でのボランティア活動に行っていました。

本活動は、震災ボランティア活動(2011)をきっかけに、本学ラグビー部と株式会社安藤・間が3年間に亘って地域社会貢献活動を実施してきたもので、今年で4回目を迎えました。

今年度はラグビー部に加え、新たに硬式野球部も参画し、大島で牡蠣養殖用のイカダのアンカーづくりや、気仙沼市内の中学生を対象にした野球教室、児童養護施設でのラグビー教室、中学生と高校生を対象としたラグビー教室を実施しました。

ラグビー部では過去のボランティアにも参加した学生がいるため、昨年よりも建物が増えていたことや、昨年土砂を撤去した敷地に新たな倉庫が建っていた等、環境の変化に気付く学生がいたことから、学年が変わっても継続して参加してくれている学生がいることに現地の方々からも、安藤ハザマの参加者からも感謝のお言葉を頂きました。

また、中学生、高校生とのラグビー教室では、参加してくれた生徒たちは監督やコーチ、学生の声に真剣に耳を傾け、とても積極的に練習に取り組んでいる姿を見ることができ、今年から新たな取り組みである野球教室は、会場近隣の方々が見学に来たり、おもてなしのBBQを用意して頂けたりなどの歓迎を受け大変好評でした。練習は基本から、実践的なメニューがある中で、学生達は熱心かつ丁寧に指導を行い、参加してくれた生徒たちも真剣に覚えてくれました。

最終日には、気仙沼地域社会との交流会の一環でタグラグビー対抗(参加者400名)を開催し、こども達や現地の方々との交流を通じて学生自身も多くを学び、成長できるきっかけが多かったボランティアとなりました。

震災で被災してから、既に3年が経過しましたが、未だに復興の目処がつかない地域もあり、特に今回訪問した大島では毎年人口が減少し、小学校が3校閉校になってしまった現状があります。

そのような厳しい環境の中でも、学生が気仙沼を訪問することを毎年楽しみにして下さっているの方々がいるため、今後も安藤ハザマと連携して本学が継続して実践できる社会貢献活動と位置付けていきたいです。

(関東学院大学)



「コンフィデンスキャンプ」 (震災復興支援キャンプ) を終えて

震災から3年半。震災後4回目の夏休みに、関東学院中高では、震災復興支援のキャンプを実施しました。中高では、震災直後から祈りと共に様々な被災者支援活動と被災地復興支援のための募金を行ってきました。募金に関しては、お願いと共に寄せられたお金の有効な利用方法を模索し続けてきました。そしてこの夏、募金の総額が100万円を超えるまとまったお金になった事もあり、横浜YMCAと共同で震災復興支援のキャンプを行う事にしました。募金を用いて、富士山麓に招待した福島と宮城の発達障がいの子どもたちが、思いっきり外で遊び、成功体験を増やし、自立する心と自信(コンフィデンス)を育てる事を目的としたキャンプです。横浜YMCAでは発達障がいの子どもたちとその家族の支援を継続的に行っているため、このキャンプを実現する事が出来たのです。当日は、富士山YMCA(朝霧高原)に宮城・福島から子ども、大人39名、YMCAスタッフ・リーダー5名、中高からの参加生徒・教員15名、総勢59名が集まり、「コンフィデンス」キャンプを行う事ができました。梅雨明け前で、雨が降る時間もありましたが、予定していたニジマスのつかみ取りや川遊びの時には良い天気にも恵まれ、楽しく外遊びをしたり、富士宮焼そばをつくって食べたり、楽しいひと時を過ごす事が出来ました。本校の生徒たちもリーダーとして子どもたちといっぱい遊ぶ事が出来ました。現在でも福島では、原子力発電所からの放射線のために、山などでの外遊びは制限せざるをえない状況が続いている現実を再認識しながら、そのような現実を抱えながらも、出来ないと思っていた事が様々な経験を通して出来るようになり、うれしそうなお子どもの姿が印象的でした。夜には、生徒たちと共に、参加者の大人の方々から震災時の事や復興の事について聞く機会が与えられました。発達障がいの子どもたちとその家族にとって避難所での生活や新しい土地への転居が大きなストレスである事を改めて知り、支援が必要な事を実感しました。また、震災の事を忘れないで欲しい事、福島への偏見や差別がこれからも心配である事、震災後、いつかやろうではなく、今を大切にしようになった事など生徒たちにとって考えさせられる貴重な話をたくさん聞く事が出来ました。これからも多くの人々の被災地への思いと共に「イエス・キリストを土台とした校訓『人になれ 奉仕せよ』と向き合い、支援活動を継続していきたいと思えます。

(関東学院中学校高等学校)





本校の福幸支援

本校では2011年の夏休みに、サッカー部の高校生が岩手県を訪れたことがきっかけとなって、東日本大震災の福幸支援活動がスタートしました。当時は瓦礫の撤去作業や、側溝の泥出し、冠水した農地や耕作放棄・休耕地の復耕支援などや、吹奏楽部の有志が仮設住宅を訪問して、ミニコンサートを開催していましたが、現地の状況も刻々と変化をして、ボランティア活動の内容も随分変わってきました。現在では仮設住宅にお住まいの方々が、憩いの場として集える農園づくりのお手伝い、そこで生った野菜を収穫する作業、サンタクロースに扮して仮設住宅や保育園などを訪れてプレゼントの配付活動、語り部の方々から様々な思いを伺うなど、時の流れとともに多様化してきました。この活動は高校生限定の希望者参加のボランティア活動ですが、震災から3年半経った今も参加者が絶えない理由は、中学1・2年次に実施している施設訪問や有志が参加することも園のお手伝いなど、日常的に行っているボランティア活動や、中学3年生の「福祉・ボランティア」の授業などが礎となっているのではないかと考えております。特にリピーターとして毎回参加をしてくれる生徒の心の中には、現地に足を運んだ者にしか感じ取れない強い思いがあるのでしょうか。

「できる人が、できる時に、できることを」このボランティア活動の原点を忘れずに、そして校訓「人になれ 奉仕せよ」の具現化を目指して、被災地が被災地と呼ばれなくなるまで、本校では福幸支援を続けて行きたいと思えます。

(関東学院六浦中学校・高等学校)



校訓の実践、SG 活動

「私(わたくし)たちはきょう一日、サービス・グループの仕事誇りをもって果たします。これをみんなの前で約束します」

これは毎朝、SGによって行われる「SGの誓い」です。

SGはSERVICE GROUP(サービス グループ)の略称です。校訓「人になれ 奉仕せよ」を具体的に実践するため、小学校草創期につくられました。毎日教員1名と児童各クラス2名ずつがグループをつくり、その日一日率先して奉仕を心がけるよう努めます。

SGの一日は朝の集会から始まります。6年SGが司会を務め、その日にそれぞれが考えている奉仕を発表していきます。ランチパックの整理、昇降口の掃除、先生のお手伝いなど、奉仕を考えるとところからSGの活動は始まります。友達のSG活動を見ながら「そういう奉仕もあったのか」と気づくこともあります。この日は遊びたい気持ちもちょっぴり我慢してSGの活動にはげます。

一日のSG活動の締めくくりはSGの反省会です。それぞれがその日行った奉仕について発表し合い、「明日のSGは、今日私たち





ができなかった奉仕ができますように」と祈って一日の活動を終わります。

小学校で意識して奉仕を実践してきた子ども達は、卒業後それぞれの歩みを進める中で奉仕の大切さに気づきます。そして意識しなくとも奉仕することができる自分に気づくといいます。何をすることが友達に、先生に、上級生に、下級生によろこばれるのかを考えて行う奉仕。SG活動を通して人に、そして神様に仕える子どもが育つよう、日々祈っています。

(関東学院小学校)



六浦小学校からのプレゼント

4～6年生が行う児童会活動の中にチパレ委員会があります。カレン族の子どもたちが生活する寮がチパレ地方にあるのでこの名前がつけました。委員会では、タイ北部にあるチパレ地方のティワタ村の寮の子どもたちとの交流および支援活動をしています。今年度もチパレ委員会で話し合いをしました。その結果、募金活動をするようになりました。全校朝会でチパレ委員長が、みんなに募金のお願いをしました。またポスターを書いて掲示しました。募金は、約15万円集まりました。そのお金で医薬品、サッカーボール、歯ブラシ、石鹸、洗剤などをチェンマイで購入して、車で6時間かけて寮に行き、子どもたちにプレゼントしました。

この寮は、アメリカの教会からの支援を受けています。しかし数年後には、支援は無くなるそうです。そうすると運営できない状況になるかもしれません。本校では、これからも支援活動を継続していきたいと思っています。



ほくのお大切なお友だち

今年で13回を数えるタイ訪問団に、六浦小学校の4年生と6年生の2名が参加した。カレン族の村の子どもたちとの交わりの中で、次のような感想を述べた。

「ほくが仲良くなった、大切なお友だちです。ほくが、村で生活をしていて、お母さんに年に2回しか会えないのに、いつも笑顔でいられるところが、すごいなあと思いました。持っている物がとても少ないのに、ほくにカバンやマフラーをくれて、とてもうれしかったです。だけど、ほくにプレゼントをくれたことで、みんなが、こまっていないかしんばいになりました。寮のみんなは、先生に言われなくても、それぞれ、自分たちの出来る事を積極的にしていて、それをあたりまえに、毎日していることが、すごいなあと思いました。幼稚園から高校生までが、大きな家族のようになかよくくらしっていて、すごいなあと思いました。なぜなら、ほくは、弟とけんかばかりしてしまうからです。ほくと、話す言葉はちがったけど、気持ちが通じ合えると、すぐに友達になれたのがうれしかったです。また、ぜったいにタイに行きたいです!!」

(4年 佐藤 晴基)

自分のことより、人のことを考えて、自分のものを惜しみなく差し出すということ、これが、人の姿であり、奉仕の心なのだと思う。カレン族の子どもたちからいただいたこの『宝物』は、「人になれ 奉仕せよ」を肌で感じさせてくれたのだと思う。

(関東学院六浦小学校)



会ったことのないお友達を思って… (手作りクッキーのお店屋さん活動から)

六浦こども園の年長組（5歳児）は昨年から福島県にある 平幼稚園の砂場プロジェクト「花いっぱい運動」に自分達ができることで協力しよう！と活動をしています。園で行われるおりぶ祭（バザー）で自分達が作った手作りクッキーを販売し、そのお金を平幼稚園へ送りました。

この写真は平幼稚園へ送る手紙に添える絵とクッキーやさんのお店の飾りを描いているところです。会ったことのない見えない相手（平幼稚園で過ごすお友達）のことを思いながら、一人ひとりが気持ちを込めて描きました。



おりぶ祭当日のクッキーやさんは大繁盛でした。この写真はおりぶ祭でのクッキーやさんの様子です。次から次へとお客さんが訪れ、クッキーは完売となりました。子ども達は「いらっしゃいませー」と大きな声でお客さんを迎え、一人ひとりのお客さんに丁寧にクッキーを渡しました。自分達で作ったものが沢山の人の喜びに、そこで得たもの（売り上げ）がまた人の為に役立つということを体験することができました。子ども達はとても嬉しそうな表情をして、またどこか誇らしげでした。子ども達の思いと共に、活動で得た売上金が募金という形で届けられ、平幼稚園の子ども達の豊かな環境作りのプロジェクトが成功するようにと祈っています。

（関東学院六浦こども園）



子ども達と過ごす日々

「認定こども園」として3年目となりました。制度の変わり目にあり、来年度からは子ども・子育て支援新制度のもとでのあゆみとなります。変わらないことは、私達は子どもも保護者も、教職員も神の恵みと愛のもとで生かされ、共に育つことを喜びとしながら、より良い保育を展開していくということです。

それは、「食材や水質にこだわる給食」という他園との差別化でとらえたり、「保育の質は保護者が善し悪しを選べば良い」また、「個々の園が競い合って良くなる

もの」という市場原理の質のことではありません。本来、質の良い保育は全ての子ども達に保障されるべきものという前提があります。それゆえ、子どもの長期的な発達に対して、持続的な良い影響をもたらし、結果社会への大きな利益となることが検証され、世界的にも Starting strong と注目を得たのです。このことは、とりわけ社会経済的に弱い立場におかれている子ども達に効果があるといわれています。言い換えるならば、社会的に弱い立場にある、あるいは発達の困難を抱えた子ども達こそ、質の良い保育が受けられるものでなければ

ならないということです。弱く憂う者に寄り添う、イエス様のまなざしと重なり、関東学院らしさにつながっています。

0歳児から共にする礼拝では、「神様きれなお花を咲かせて下さってありがとうございます。私達もこの花のように、一人ひとり美しい存在です」と神様の愛と恵みの中にいるこ

とに気づかされます。お花を持って地域の方をお訪ねすることからは、地域との関わりの中で育っていることを学びます。このように、認められ、つながり、分かち合うことのできる乳幼児期を過ごす日々が、幼い子ども達にとっての校訓『人になれ 奉仕せよ』となっています。(関東学院のびのびのば園)

(P.30～P.35に掲載した写真とその説明文は、2014年12月17日にみなとみらい大ホールで開催された関東学院クリスマスコンサートの会場ロビーで学院史資料室が開催した、学院史資料展2014「建学の精神と校訓『人になれ 奉仕せよ』の教育」の記録である。また同展示は、2015年3月3日から同年3月30日までフォーサイト21の1階エントランス・ロビーで開催中である。)

編集後記

編集後記にかえて、感謝と追悼と祈り

本号では、関東学院の校訓「人になれ 奉仕せよ」を特集した。掲載順にご執筆者に対して感謝の気持ちをお伝えしつつ、掲載原稿について少しく説明させていただく。

まず、高野進先生からは、「校訓『人になれ 奉仕せよ』の思想的淵源」と題する貴重な原稿をいただいた。先生によれば、校訓を告辞する前の坂田祐先生の思想的な淵源は、少なくとも6つ考えられるが、その一つである、在学当時の旧制第一高等学校校長、新渡戸稲造による『衣服哲学』(カーライル著)講演などの著作からの研究である。

次に小林照夫先生からは、「校訓『人になれ 奉仕せよ』と関東学院セツルメント活動—故富田富士雄先生を通して生きる関東学院マインド—」と題して、富田先生がセツルメント活動をとおりて校訓を実感され、その後、研究分野の社会学の研究も校訓の内実化であることなどが記述されている。富田先生のお弟子さんである小林先生ご本人も校訓を生きておられる。

三浦啓治氏からは、元関東学院職員であった経験ならではの具体的事実の報告およびセツルメント活動の研究成果を発表していただいた。

坂田創先生が2014年5月8日に召天された。心からの哀悼の意を表します。先生の絶筆文となった、『橄欖会会報』(45号)(中高同窓会誌)掲載原稿を掲載させていただいた。関東学院中学校高等学校の教諭を長年勤められ、晩年は、大学キリスト教と文化研究所の客員研究員として坂田祐研究の中心的な働きをなされた。本ニュース・レターとの関わりでは、前号に、校訓「人になれ 奉仕せよ」に続いて坂田祐先生ご本人が筆で書かれた「その土台はイエス・キリスト也」がある色紙とその説明文を掲載させていただいた。今号ではその色紙を追悼の気持ちを含めて再掲載した。2014年2月発行の前号掲載の際、3月に創先生からお礼の電話をいただいたのが、この世での最期の交流となってしまった。

2014年5月13日に日本バプテスト同盟霞ヶ丘教会で挙行された告別式での森島牧人先生(当時、学院長)による説教を掲載させていただいた。

ご友人の佐藤和久先生からは「坂田創先生の思い出」と題する玉稿をいただいた。「『人になれ 奉仕せよ』の関東学院校訓に生き抜いた先生のお姿を鮮明に表している」との記述に感銘した。

1919(大正8)年4月9日仮校舎の前で挙行された中学関東学院第1回入学式の式辞に関する坂田祐先生の記事「関東学院設立」を読み返し、改めて気づいたことがある。その中で校訓についての重要な部分を引用する。

私は式辞にキリスト教の精神を高調して建学の精神とし、これを具体的に表現するために『人になれ』と力説した。これは私が祈って上から示された言葉であった。『……諸子は将来学者になり、教育家になり、実業家になり、政治家になり、弁護士になり、医者になり、軍人になり……になるであろうが、何者にかなる前に、先ず人にならなければならない。……』と強調した。

次に述べたことは『奉仕せよ』であった。人のために、社会のために、国のために、人類のために尽すことであると力説した。爾来キリスト教の精神をもって本学院建学の精神とし、これを具体的に表現するために『人になれ』『奉仕せよ』の二つの言葉を校訓として、機会ある毎にこれを強調して今日に至ったのである。キリストの教訓をもって人たるの人格をみがき、キリストの愛の精神をもって奉仕することである。

下線は筆者によるものであるが、それらの箇所は、校訓を「人になれ 奉仕せよ」と定めた理由であり、その説明である。それを短い言葉に要約すれば、「その土台はイエス・キリスト也」であることを再確認することができた。

「横浜からまた一つ大きな星が消えた」の書き出しで始まる追悼記事が、2014年1月発行の神奈川新聞に掲載された。1月23日、関東学院中学部卒業生の神谷量平氏が召天されたのである。衷心よりの哀悼の意を表します。その5ヶ月前の2013年8月6日発行の神奈川新聞に「99歳、反権力の演劇」と題する記事が写真付きで大きく掲載された。このたび神奈川新聞社から転載許諾をいただき、誌上に載せることができた。この場を借りて感謝申し上げます。

『京浜文学』は、神谷氏が発行人だったため最終号がご本人の追悼号となった。その中の関田寛雄先生著の「神谷量平という人(1914～2014)—その晩年の追想—」を転載した。関田先生ご本人と同誌発行所の京浜文学会事務局の栗原治人氏からは、転載許諾をご快諾いただいた。

神谷氏と交流された、三浦啓治氏と菊池友子氏から追悼文をいただいた。

2003年、小生が広報課の所属時にご自宅を訪れ、インタビューした記録が『関東学院学報』(No.25)に掲載された。同記事もここに転載する。

2013年8月11日に川崎能楽堂で観劇した神谷氏作「女の戦記」公演の直後にお祝いのお気持ちを込めてご本人と握手をした掌のぬくもりが忘れられない。これが最期の交流であった。

神谷量平氏の奥様の静子様からもご主人に関する文章と写真の転載をご快諾いただいた。

「学院史資料展2014」を記録として留める。テーマが「建学の精神と校訓『人になれ 奉仕せよ』の教育」だからである。

2014年、グレース先生のご記念碑が、中高のグレース礼拝堂前に移設された。先生の生涯を学ぶときに、奇しくもその校訓についての想いを、生徒向けに語られた先生の言葉の中に見出した。「『人になれ 奉仕せよ』の理想を忘れないで」

今回、校訓をテーマに編集しての結論は次のとおりである。私学であり、キリスト教学校の関東学院にとっての存在意義は、建学の精神である。それを端的に表された校訓「人になれ 奉仕せよ」に「その土台はイエス・キリスト也」を加えて理解した上で行動することが、関東学院存続の要諦であると考える。

この『ニュース・レター』の編集後記を記述するのは、立場上、最後となる。創刊号は、1999年に発行された。学内印刷で翌年2000年の2号まで続いた。その後、都合により休刊された。2003年に小職が室長の就任時に外注印刷で復刊した。それ以降今回の18号まで継続発行されていることを喜んでいる。自校の歴史を大切にしない学校に、伝統は力とはならない。131年の歴史を擁する関東学院にとって、その歴史は宝である。それを証明することができる学院史資料を大切に保存し、活用することが、関東学院の存続にとっても重要である。神様の御祝福とお守りが関東学院関係者お一人おひとりの上にありますようにお祈りし、筆を置きたい。

(学院史資料室/学院宗教センター事務室長・瀬沼達也)

愛と平和と祈りの人・グレセット先生の 記念碑、関東学院へ



紹介したい。

なぜ現在、三春台校地にグレセット先生を冠した礼拝堂があるのであろうか？ かつてグレセット先生の教え子であり、後に同僚にもなった、山本太郎元中高校長の言葉にその答えがある。

「私がどうしても為したかつた記念事業の一つは故グレセット先生の本学院に対する御奉仕を改めて思いおこし、先生に対する感謝の念を新たにすする事であつた。先生こそは坂田（祐）先生と共にその生涯の殆どすべてを本学院のために捧げつくされた方だからである。先生はその昔、前身校の東京学院第五代院長であられたし又新生関東学院となつてからは創立当初から理事であり又最も忠実な一人の教師として多くの生徒の心の中に忘れがたい印象を残された人である。

私達はさきに（1952年）先生を記念する為めグレセット記念講堂を建てた（後略）」

そして先生の人となりとは、同じ文章の中でこう記述されている。

「先生は、天性極めて温厚にして寡黙な人であつたが、自分の使命とする道を、ただ一筋に忠実に生き抜かれた。先生には天文学の趣味があり、立派な天体望遠鏡を学校の屋上にすえつけたりして、夜遅くまで観測され、同好の生徒も参加して、教えを受けた者も少なくない。天文学は、先生がむしろ自分の人生をかけて本当にやりたかつたことでなかつたか、と思うのである。むしろかなりすぐれた学者としての域に達しておられたものようだった。（中略）

先生は日本を愛された。その若き日、宣教師として初めて日本に遣わされた時を契機として、この国のために生命を賭することを決意せられ、日本を永住の地と定められた。それはあの苛烈な第二次世界大戦中も、外国人の引きあげ勧告もしりぞけて、家族と別れてさえ、ひとり日本に留まり、日本人と戦争中の苦労を共にされた事実をもつてしても、明らかに知ることができる。」〔註（2）〕

ここからは、先生の晩年を『関東学院の源流を探る』からの引用文により紹介したい。

「1929年に日本に戻って、関東学院で教える仕事を再開した。しかしやがて日本の社会は軍国主義化し、アメリカ人にとっては生活すること自体が不便になった。彼は家族を帰国させ、単身日本に残った。しばらくは東京から横浜に通勤して、教鞭をとったが、それも許されなくなり、世田谷の住宅に軟禁されるようになった。鬼畜米英を吹き込まれた日本社会にアメリカ人がひとり暮らすことはどんなに大変なことであつた

ジェイムズ・フラートン・グレセット先生（James Fullerton Gressitt, 1883～1945）は、愛と平和と祈りの人であつた。

2014年8月8日、多磨霊園のグレセット先生の遺骨が、武蔵野霊園東京共同墓苑に移された。同年10月7日には多磨霊園から先生のモニュメント（記念碑）の一つが、三春台校地のグレセット礼拝堂の入口前に移設された。〔註（1）〕

この機会にグレセット先生を紹介

ろう。とうとう重症の栄養失調におちいった。

ついに悲惨な戦争が終った時、グレセットは衰えた身体を鞭打って、新生日本のためにマッカーサー元帥に働きかけている。長男のリンスリー・グレセットは（中略）海軍大佐として従軍して来日した。こうして父子が再会できた。父親の健康を気づかかってアメリカで治療が受けられるように、ご子息が手配したが、グレセットは厚木空港で倒れて、帰国がかなわず、日本の地に埋葬された。彼は多磨霊園の外国人墓地に眠っている。グレセットは、いつも慈愛と柔和の微笑を顔にたたえていたという。彼はアメリカと日本のために苦悩し、嘆き、祈っていた。旧約聖書の預言者エレミヤのような人であつた。」

「関東学院に入学したのであるから、毎年同級生の中に新しい友を得ることになる。それができないなら、失敗である。君たちは教師を友とすることができる。君たちは教師が友だとは考えなかつたであろう。教師は君たちをよく理解し、君たちの中にある最善のものを引き出す方法を知っておられる。このことに気がつかなければ、失敗である。……

君たちの人生行路が波乱にみちて、持ちこたえられなかったら、友なる教師が君たちを迎え、相談ののってくれるだろう。教師から君たちは共感と理解と支援を得ることができるだろう。

まとめとして、君たちには、習得した英語を続けて用いて欲しいと願っている。それに『人になれ、奉仕せよ』の理想を忘れないでいただきたい。これこそ関東学院の若者たちの推進力であり、平衡装置である。」〔註（3）〕

以上は、学校を羽ばたいていく若者に向けて語られた言葉である。しかし「人になれ 奉仕せよ」の理想を忘れないで、それをモットーとして生きることを、自ら生命を賭して歩まれたのは他でもない、グレセット先生ご本人である。先生は真に愛と平和と祈りの人であつた。

〔註（1）〕『いんまぬえる』（No.124）掲載、佐藤洋晴著「編集後記」参考（2014年、関東学院発行）。モニュメントは二つあつたが、一つは文字が判読不可のため処分された。記念講堂は、1881年、現在の位置に立て替えられ、1997年にグレセット礼拝堂と改称された。）

〔註（2）〕J.F.グレセット著『愛と祈り』掲載、山本太郎著（『グレセット先生夫妻の事ども』（1970年、関東学院発行）よりの引用文。（ ）内は瀬沼による加筆あるいは註記、それ以外の文章はすべて原文のまま）



〔註（3）〕高野進著『関東学院の源流を探る』（2009年、関東学院発行）よりの引用文。この文章は、2009年にまとめられたものである。遺骨は、このたび冒頭の記述のとおり移された。）

（学院史資料室 事務室長
瀬沼達也 編著）

KANTO GAKUIN Archives

関東学院学院史資料室 ニュース・レター 第18号 発行日 2015(平成27)年3月10日

発行人 関東学院 学院長 小河 陽

編集 『関東学院学院史資料室ニュース・レター』編集委員会

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1

TEL. 045-786-7066 FAX. 045-786-2932